

昨年の史學地理學界

● 史 學 界

史學一般 大正十一年に於ける一般思想界の趨勢は前年度と略同一の經路を辿つて居たが、史學一般に關する論議が殊更寂寥であつたやうに覺えるのは遺憾の次第である。只、漸次權威ある歐洲學者の論著が、極めて眞面目なる態度を以て、翻譯紹介され來りつゝあるといふ近來の趨勢は、吾が史學界に好箇の刺激を與へるものとして、寔に慶ぶべき現象と思惟される。就中、昨年度には坂口博士の主宰で史學叢書の刊行が企てられ、既に其の第一篇「ベルンハイム著歴史とは何ぞや」(坂口昂、小野鐵二共譯)第三篇「リース著世界史の使命」(坂口昂、安藤俊雄共譯)が公にされ、既出の「ランブレヒト著近代歴史學」(和辻哲郎譯)を併せて全部七篇が逐次岩波書店から發刊される豫定であるといふことは、特筆に値する。就中史學の入門書として世界的權威を有する Burnheim, E.

leitung in das Geschichtswissenschaft. の最新版を最も忠實に譯述せる「歴史とは何ぞや」を、嘗て本誌上に連載せし Riees, Allgemeine Weltgeschichte. 第一卷の緒論邦譯に細密なる備考の譯出をも添へて其の完璧を見たる「世界史の使命」は、共に昨年度史學界の大いなる收獲と稱して宜しからう。これを外にして獨逸西南學派の思想學說に對する紹介と論議は、依然として史學關係の言說論著の中心部を成して居るので、リツカート一派の價值哲學歴史哲學の紹介、認識論方法論に關する論議が、比較的數多く公にされて居たやうである。「リツケルトの歴史哲學」(米田庄太郎)「リツケルトの歴史哲學」(田邊重三)「文化科學と自然科學」(リツカート著佐竹哲雄譯)の諸書は昨春相前後して其の公刊を見たもので、孰れも此學派の思想を知るべき標準となるものである。「リツケルト哲學體系を讀む」(桑本嚴實、丁酉倫理)はリツケルトの哲學體系第一篇哲學の一般的基礎の梗概を紹介したもので、

其中でも價值論の材料となる諸文化現象を列擧せる第六章哲學史的文化生活ミ、價值の體系組織を論ぜる第七章哲學の體系ミを摘要せる部分は殊に有益なる文字であらう。歴史に對する近代の認識論的考察(川合貞一、史學)は歴史の本質を個別的特殊のミ觀たシヨーベンハウエルからヴ井ンデルバンドやリツカートの方法論的見地から立てた價值論を説明し、更にミユンスターベルヒやフリシユアイゼン・ケーラーの、方法論的に經驗科學を特殊普遍ミで分別しやうミする見解に對する反對論を紹介して、結局本體論的見地に基く科學の分類から、歴史は其の内容實質たる文化の概念其物よりして目的論的に取扱はれなければならないミ斷じたものである。『歴史の認識に就いて』(田邊元、史林)は、歴史認識の對象となるものは、對象の全體に對する部分が相互全く外的なる關係に並置され、其間に何等內面的意味の發展なるものがない自然科學の場合ミ異り、個性を有する全體が部分を內面的意味の關係に内部から統一するもの、即ち自己の內面的創造力に由つて、體驗せられた事象を内から、そ

の意味に従ひ統一する廣義の人格を主體ミするものでなければならぬので、これを認識するのは、歴史家の特殊化限定された現實的な人格即ち主觀の背後にある普遍的全體的人格によつて共感理解をなすにあるべく、是の如き一種の直觀、內面的理解は歴史認識の精髓であるミ論じたものである。史學史の方面では「社會學の先驅者としてのビコ」(林惠海、東亞之光)が、歴史的經驗的事實から歸納して、國民の起原發達衰頹滅亡に關する原理を樹立せんミした「新科學論」の著者ビコの、人類の歴史ミ人類の哲學ミを合一せる社會科學建設の最初の試みを説示せるものであり、「アクトン卿」(鈴木錠之助、史學)はブラリスの「現代傳記研究中」のアクトン卿評論から、この大史家の閱歷性行ミ其の學問上の識見を述べたものである。最近歐洲の讀書界を騒がせしスベングラの世界史觀は、又我が學界の視聽を惹くに至り、「スベングレルの一先驅者」(千葉鑛藏、丁酉倫理)に、かくの如き文明乃至進歩の輪廻説はあながちス氏の創唱にあらで其由來古きを述べ、かの埃及學者フリンダース・ペトリイ氏の文明

轉變説を紹介して、スベングルルの所論を酷示せる點を示し、只ス氏の根本觀念が宿命論に傾き著しく懷疑的なに對し、ベ氏の思想は大體目的論的に絶對に人道を信じ前途に光明を認め居る點を注意したものであり、「シベングルル泰西の結末を讀む」(飯田忠純、史學)は、この名著の第一巻を紹介し、世界史の問題、文明と文化、文化の典型等に關する原著者の卓拔な所論を要説して居る。なほ「文化史とは何ぞや」(三浦周行、京都日出新聞)は文化史の使命が決して精神的方面に局限さるべきでなく、物質的方面の史實特に經濟史の探究にも其の重要な地位を與ふべきであるが、而かも唯物史觀の如く餘りに偏倚してはならないと言ひ、從來の歴史は社會の表面に現はれた事實を見る事は出来ても、其裏面に動く力を見通すに充分でないことを指摘してゐる。(植村)

國史 昨年に於ける國史の論著の中先づ一般史、關する方面より觀察するならば「大日本全史」(大森金五郎)は最も彪大なるもの、一つであつて、國史を通じて最近の學說を巧みに取捨摭梅したものであり、「國民文化史概論」

(中村孝也)は國史を文化史的見地から記述したものであり「日本文化生活史」(西村文則、中央史壇)は國民の生活思想を中心として觀察したものであるが「日本史の研究」(三浦周行)が昨年中國史界に現はれた最も大なる收穫の一つである事は何人も否む事の出来ないものであつて、七十三篇の論著を、文化批判、人物批判、對外關係、歴史地理、史料研究の五編に輯收し、或は從來全く不明裡に埋れた史實を闡明したり、或は全然誤り傳へられたものを究明したり、又足利時代の庶民運動や我文化の由來を都市港灣との關係を論究したり抔した者であつて、又其序言には近世の國史研究に關する著者の史觀が明かにされて居る、更に「現代史觀」(同人)に至つては著者専門研究の副産物ではあるが、過去の研究に没頭する餘り現代社會相に無關心たり勝ちな史家が、日常生活に最も關係深く且つ最も興味を惹くべき出来事を深遠なる史鏡にかけて批判を加へたものであつて、現代國民の文化生活は過去に於ける訓練や努力に負ふ所の多い事が實證されて居る。略時を同じうして出版に着手された大鐙閣の

「日本文化史」ミ早稻田大學出版部の「國民の日本史」ミは何れも叢書として刊行されたものではあるけれども、從來の或る種の闕陥を補つたものとして注意するべきであつて、後者は未だ完成して居ないが、前者は「古代」(安藤正次)「奈良朝」(西村爲之助)「平安朝初期」(太田亮)「平安朝中期」(西岡虎之助)「平安朝末期」(竹岡勝也)「鎌倉時代」(龍蕭)「南北朝時代」(中村直勝)「室町時代」(魚澄總五郎)「安土桃山時代」(花見朔巳)「江戸時代前期」(白澤清入)「江戸時代後期」(清原貞雄)「明治時代」(時野谷常三郎)の十二冊を完了した。前年より續刊せられつゝあつた、内田銀藏博士の遺稿も、「史學理論」及び「内田銀藏講論集」の二冊を出して漸く豫定の出版を終了したのであつた。次に社會史に關するものとしては、「文化の下剋上」(三浦周行、大阪朝日新聞)は我國文化の一特徴は文化の下剋上の行はれたことにありといひ、これあればこそ我國史は常に活氣を出し更生の氣分に満ちたのであるといひ、假名の普及、連歌の流行、花柳風俗の浸潤が、如何に我國文化史上留意するべきものであるかを説いてゐる

のは著者の文化史觀を見るに足る、古代の社會民族の方面では「ケンペルの日本歴史觀(牧健二、歴史ミ地理)に於て、ケンペルが日本語を純粹な言語であるこの理由から、日本人も亦獨立した本來の國民であるミ斷じ、バベルの塔の話に結び附けて日本人はバビロニアから來たのであらうミ推斷した事を紹介されたが、今一つ言語の方面から我日本民族の由來を考察しやうとしたものに「太古の九州四國」(坪井九馬三、史學雜誌)がある。太古の九州四國の住民を言語の上より論じて南洋系統のチャム族なる事を指摘し、漢魏時代に於ける九州の國勢は小部落に分裂し、村國家が造られて居つた様であり、熊ミ會ミ久米の三部族が神武天皇の大施の下に主力ミなつたらしく、是等の語は何れも侮蔑の意を有し、筑紫人が呼んだ名であるミし、更に其時代の宗教を觀察して月神の尊崇が盛んに行はれたミし、筑紫は即ち此の大神の御名を國號に用ゐたもので、*Yamato* の *mi* は神、王、等に對する至上の敬語であるミ言ひ、其當時の産業は漁撈、狩獵、農作、養産の四種で果實蔬菜はまだ現はれないミ説いて

居る頗る暗示に富んだものである。また「くゞつ名義考」

(喜田貞吉、民族と歴史)はもゝ蝦蟇を其の鳴聲からククミ呼んだが一方に於て古代社會の浮浪人が人目を避けて夜間なごに徘徊する事や、好んで谷間に棲息する事からして之をククに比し蟻人即ちクグト呼んだもので、更にクグツも訛り、谷クグミ呼ばれる事になったので傀儡子の事であらうと言ひ、更に「妹背島」(同人、同誌)に關する今昔物語の説話を擧げ、古代に於ける皇室御近親間の御配偶を表示して後に支那思想の感化を受ける迄は寧ろ近親結婚を以て正しいものと解せられたのである事を言ひ、「郷里の長者と長者屋敷」(同人、同誌)は長者の語が我國に行はるゝに至つたのを佛教の影響とし、支那の譯經者が梵語の富者を翻譯して長者と言つた事が長者なる言葉の起りであるとし「此の長者號の發行に就て」(同人、同誌)と言はれた根本概念から出發して、しかし我國で行はれた長者の語は本來必ずしも鉅萬の富の所有者ではなく、其文字通りに何かに長たる者の意味であつて郷里の長者は里長坊長の意であるとし、「長者と富豪」(倉光清

六、同誌)にも前説を支持して居る。「白衣の神人符坂寄

人」(喜田貞吉、同誌)は鹿島から春日神幸の際に供奉した者で、一種の神人であるから其の生活の保證として興福寺より其配下たる大和國中に於いて油の專賣權を與へられて居つたのであつて、坂の者ミ呼ばれた奈良猿樂の徒であるとする説は「職人町人等が國名を呼び名とした事の意義」(同人、同誌)は王朝時代に於ける浮浪人の中には河原者坂の者の仲間入りをしたものがあつたらうが、それらが其郷國へ通稱として使用した事を此の源流とすべきであつて、それが職人町人等が相當の手續を経て勅許を得たり或は宮門跡堂上家等から許可を得て受領のものゝ國名を用ゐたものと形が一であるから彼等も亦受領の名の積りで居つたこともあつたらうと言つて居る。次に時代の概観としては、「國史上に於ける源平時代の意義」(中村直勝、歴史と地理)は平安末期に現はれた淨土教の墮落の文明、成金の藝術に新しい刺激と意義を與へたのが源平時代であつて多數の民衆が協力して作り上げた藝術を産み出した所に本當の淨土教の文化があるとし、

帝權伸長史の上からも見逃すべからざる時代であるけれども、更に重大なる意義は國民の血液が東夷との混血によりて當時の民心に異常の興奮が起つたここに存するこ

し「後鳥羽院靈託」その時勢（龍肅史學雜誌）は承久役に失敗して流謫の御身となられた三上皇の中でも後鳥羽上皇は中堅者であらせられたから、其御最後か不運であつた。けに公武兩者から神經的な觀察の對象とせられ、當時の世相であつた種々の迷信觀念が伴つて靈託説が出来たので、上皇の還京が廟堂で議せられ、中原師員が東下して幕府に懲惡する事になつたが、やがて上皇は隱岐の孤島で崩御され、間もなく幕府の不幸が上皇の怨靈であるといふ噂を助長し、鎌倉時代を通じて公武兩社會に深刻なる感化を與へたのであると言ひ、「世の替はり目」京都（原勝郎、藝文）は天文頃前後を以て國史中の世の替はり目の一つであるとし、名譽榮爵を渴望する族が絶えず上洛する事や、多額の黃白を投じて物語歌集等を都から取寄せた事、漫遊の連歌師等を引き留めたり態々呼び迎へた事等を挙げ此時代は政治的には支離滅裂の時

代であつたけれども日本文化の統一には大なる寄與をした時代である事を認めて居る。

政治的、方面に於ては、蒙古襲來の一批判（栢原昌三、歴史と地理）は忽必烈の國書は何れも平和の修交を求めたものであつて、其後の國書も皆禮を厚うし辭を卑うして居つて、決して我國を屬國視してないにも拘らず書辭不遜の故を以て斥けたのは我國に古來より横れる陳北親南の思想からであつて、殊に鎌倉五山あたりに居つた宋僧又は入宋禪僧等の排蒙思想が、幕府を動かしたのであるこの新解釋を下して居る。この時代のものに就ては「青砥藤綱傳の國史に於ける地位」（龍肅、中央史壇）藤綱は假令太平記作者の案出した人物であるにしても、其事蹟は鎌倉時代の代表的爲政者の行動に基いたものであるもので、鎌倉時代の政治思想——至公至平の善政が具體化されたものであると言つて居る。次に最も面白い現象は所謂南北朝時代に關する研究が割合に多く發表された事で、先づ「南北朝時代史」（田中義成）は此時代に起つた政治事實を簡潔に細大漏さず收録された者であつて、兩朝の正閏に

對して下された論斷も觀るべきであるし、北畠親房の全國的な作戰から尊氏をして終に南帝を如何にもする能はざらしめた點や、直義を以て南北合一を企てた最初の主張者であるを論ぜられた點等は、何人も首肯するに足るべきものであらう。「史上に湮滅せし五辻宮」(平泉澄、太陽)に宮が龜山院第五皇子四品兵部卿守長親王の御事であつて、御母方の祖父西園寺實任より相傳した五辻御所に住ませ給ふた事から五辻宮と呼ばれた事から、元弘三年に近江番馬の峠に兵を擧げて神器を無事に京都に歸し給ひその後奥羽の義良親王、東國の宗良親王と相呼應して鎮西に下り勤王の士を統帥し九州を席卷して京都を突かんとせられ、再び東江州に現れ更に牧の宮として南海に雄姿を示し給ふた其の奇しき運命を説き、「兒島高德」(八代國治、中央史壇)には史的價值に富む太平記の中に記さるゝ高德は必ず實在の人であらうといつて、兒島氏一族の蕃衍した地方の豊原福岡西庄は後鳥羽院領であり後醍醐天皇に傳頌されたものであるから其關係から見ても高德が勤王の旗を擧げた事はあり得べき事であると言つた

のことは、何れも從來其行蹟の明かでなかつた南朝方の二偉人を彰したものであり「中世に於ける怨靈思想」(魚澄總五郎、歴史と地理)を論じた中に於て尊氏の信仰に觸れ、彼の信仰は怨靈思想から來たものであつて、彼は殘逆と慈悲、熱烈な欲望と冷靜な忍辱、この兩極端を有し一見矛盾の如く見ゆる性格を有した人物であると言ひ、「足利尊氏の理想に就いて」(中村直勝、同誌)は、其矛盾の如く見ゆる行動は彼が源賴朝の武家政治を理想とした事と、彼が後醍醐天皇に對して有つて居る思慕の念との交錯から出發して居るのであると言つて居るのを併せ見るべき所論である。「圓觀上人」(栗野秀穂、同誌)は高時の爲に圓頓寶戒寺を建立して開山となつた事情を述べ、正平六年南山御合體のあつた最初に北朝の使者として南山に赴いた事蹟を説いて人道的の平和論者であるとして居る「南北合體條件に就きて」(三浦周行、史林)は南北朝史の最を語る何人かが、最も困難を感じる南北兩朝合體の條件を近衛家所藏文書の中に含まれて居つた足利義滿の書狀等より推して、從來知られて居る諸條件の外に諸國

の國衙領は悉く大覺寺統の御管轄とする事、長講堂領は持明院統の支配とする事の二條件もあつた。斷定し、なほ合體條件の提出者は義滿であるが、これを南朝に申入れたのは吉田兼綱である事を指摘し、且此等の合體條件に對して北朝及び幕府に履行の誠意があつたか否かを批判して此問題に對する最後の幕を下ろされたのであつた。更に降りて「本願寺」羽柴秀吉との關係（渡邊世祐、史學雜誌）は本願寺はもと三好氏に結托し、次で武田淺井朝倉等と聯盟して信長に反抗し之を法敵したので、江北の門徒門末は秀吉に對しても鋒を向け、勝家も越前で本願寺門徒を壓迫したのであつたが、本能寺の變があつて形勢は一變し、本願寺は時の爲政者勢力家と結ぶと言ふ傳統の方策に従ふて秀吉、接近し、勝家の抗爭に便宜を與へたのであるが、其正式の端緒は大徳寺の大法會に本願寺が參じたいと言つた事であらうとした。次で「元和一國一城令」（高柳光壽、同誌）は元和元年閏六月十三日江戸幕府年寄衆の奉書を以て諸大名に宛てたもので二種あつたのであるが、所謂元和一國一城の御觸乃至御

制法を稱せらるゝものは、實は割合知られない「一國一城之外破却候様」を書出した方から起つたのであり、一國とは一分國、一領内の意であるとし、當時確實に破却された城地を表示し此命令は秀忠の時代であるけれども家康の意志であつて、而かも秀吉に學んだものである言つて居る。

徳川時代に及んで「近世に於ける地方の自治に就いて」（中村直勝、歴史と地理）は多く地方所在の神社寺院を中心にして社會的階級の固定せし結果、上流社會の人々は下層社會の人々の擡頭を阻み兼ねて彼等の互助のために社寺の名によりて頼母子講、官講を組織して其の所有する社會上の特權を維持する事に務めたと言つて居り、「海北友松に就いて」（高柳光壽、國華）はその略傳、交遊を記し、妙心寺文書にある七夕附の筆功料請取に銀子一貫目並二十枚あるは米百三石三斗三升餘、凡そ現金の參千圓に相當すると言ひ、此受取狀が全部友松の自筆である事、其の所用の印章が最も信用すべきものである事からして、彼の落款を鑑別する標準になると言つて居り、「藤

眞幹に就いて「吉澤義則、藝文」は彼は決して藤井貞幹ではなく、藤を苗字として居つたもので、自ら日野氏の出だと言つて居る以上、當然藤原氏であるから藤の字を用ゐたこと、佐々木竹苞櫻藏本の略傳によりて其家系、程度及還俗、和歌、儒學、國學、篆刻、交遊、嗜好、藏書造品等を掲げ、「佐久間象山」(井野邊茂雄、國學院雜誌)は公武合體説を持つた象山が、同主義の幕府や一橋慶喜や四藩の間に感情の衝突意志の疏通を缺いて居る事を顧慮しなかつたのは、彼の失策であつたこと、殆んど凡ての志士が幕府を見限りて別箇の新天地を開かうと苦心して居るのに、彼は幕府に據りて其經綸を行はんとした丈理想家であり學究であつて、政治は其の本領ではなかつたと言ひ、外國又は外人に關するものとしては、「備慈多道留」(伊木壽一、中央史壇)は相良家文書中にある四月三日附備慈多道留の書狀を研究したもので、其印章から推して元龜天正前後に我國に渡來した西洋人の挨拶狀であるが、備慈多道留はゼスイツト教派の中で臨時に各教區を監督すべき特別の役目を有する Visitor といふ職名

であり、我國では Alexandro Vilgani の事であつて此書狀は天正八年有馬或は天草邊から相良義陽に宛てたものであると言ひ、「徳川吉宗の洋馬輸入と和蘭馬術師の渡來」(齋藤阿具、史學雜誌)は吉宗が將軍職に就いた翌年即ち享保二年の海牙文書に吉宗が洋馬に意のあつた事が見えること、爾來甲比丹デオダチが恒例登城の外に吹上馬場で馬乗を命ぜられた事より便宜を圖る爲め享保十年に蘭人が萬難を排して馬五頭と馬術師ケイゼルを舶載しケイゼルが將軍の命によりて富田又左衛門に洋式騎馬法を教授した事から、洋馬獻納に乗じた蘭人の抜け目なき商略にも言及して居り、「ゾーフと日本」(同人)は長崎の和蘭商館長として多年我國にあつたヘンドリック・ゾーフが、露國使節の渡來に際して日露交渉事件に關係しない決心をした事や、英人に出島蘭館を讓渡さんとする計畫があつた時之を拒絶した事等出島を中心したる英蘭兩國間の關係交渉を闡明したるものであつて、海牙府の國立古文書館や、英國印度省書庫を探つて得た文書や、ゾーフの遺族を訪ねて手にした世人未知の史料を基礎と

して攻究されたのは注意に價する。

幕末の外交に關するものとしては「日本外交史上に於けるウイリヤム・アダムス」(齋藤文藏、歴史地理)は、彼がオランダ人に對して熱誠を以て斡旋した結果、日本人は蘭西兩國とは異なる通商國を發見し何等顧慮する所なく鎖國の時代にありながらも通商を繼續し得たのであると言つて、彼の外交史上に於ける功蹟を認め、「ナサニエル・サザリー」いふ小笠原諸島(田保橋潔、同誌)は小笠島に永久的に殖民した最初の五名の一人である米國人サザリーが一八二九年英國商船の乗組員としてホノル、に入港し負傷の爲めに取殘された時英艦ブロスム艦長ビーチーの小笠原島發見の噂が盛んであつたので小笠原植民を決定するに至つた徑路や、其後の植民地の狀況を述べて、彼が第一に日本人と接觸を保ち日本の大君に忠誠を誓つた最初の人である事を詳説し、次で「小笠原諸島の回收」(同人、同誌)は林子平が輕卒に記載した小笠原貞頼の發見の架空傳説が東洋學者クラブロートによりて佛譯された爲に小笠原諸島の所屬に關する優先權は日本に與へられ

たのであるに、徳川幕府は何等の方策も講じないために、危く米國領たらんとしたが、萬延元年發遣の遣米使節歸朝に至り回收問題が起つた事から、水野筑後守が文久元年咸臨丸で渡航しサザリー以下三會見を遂げて彼等を歸化せしめ、次で開墾地積問題等を解決した事を初めとし、此孤島が數奇の運命に弄ばれながら終に明治九年十月十七日寺島外務卿が英米兩國公使に通牒を發し日本皇帝陛下の領土たる事を内外に認めらるゝに至つた經過を細説し、日本人の小笠原諸島に關する最初の知識は一六七〇年以上に溯る事が出来ないに拘らず、西班牙人のそれは一五四三年以前に及ぶ事が出来るが、しかも日本領土となつた事は、同島發見に關する嚴正なる研究が歐洲に於ても日本に於ても發表されなかつた爲で有して居る。「幕末に於ける海軍の創設」(古田良一、史林)は其由來經過を詳説し、長崎傳習所及び神戸海軍操練所の變遷を説いて、幕府が海軍創設の爲にした方針は、内外の事情財政の關係等已むを得ざる所であつたらうけれども、常に動搖して、徒に國帑を空費するのみで、さまでの効果

はなく、たゞ我國に洋式の海軍操練法を入れた事が其功蹟であるに結論して居る。幕末に於ける薩長土三藩の態度（井野添茂雄、國學院雜誌）は、其主義政見の異同により或は周圍の刺戟によりて變化を來して居るのは勿論であるけれども徳川氏との關ヶ原戰役以來の關係によりて其の藩情に相違を來たした事が重なる原因となつて、長藩は最も甚しく幕府に反對し土藩は幕府に最も好意を寄せ、其中間の薩藩は反感と好意とを併せ有し従つて長藩は討幕を以て土藩は佐幕を以て終始したに對して薩藩は佐幕に始り討幕に變じたのであると言つて居る。明治維新史に就ては「太政官札發行の由來」（澤田章、同誌）は明治の新政府が財政上非常なる困迫を極め宮中の御用途さへも調はなかつたので、岩倉具視等が憂慮の末、一時權宜の方法によるの外ないし金穀出納所を設けて兩本願寺以下富豪から金穀の獻納を受けたが、既に伏見鳥羽の開戦があり、局面は展開したので彌財政救済が緊急問題となつて茲に由利公正の建議に基いて終に太政官が慶應四年正月會計基金三百萬兩の募債と金札發行に至つ

た事情を評論して居る。次で「太政官札の製造」（同人、同誌）は、同年二月二十九日由利公正が直ちに京都兩替町の銀座趾を修復し新に建添をして楮幣所に充て、福井藩廳の手を経て今立郡五箇村の紙漉師に用紙の調製方を命じ、福井藩札に經驗を有する五十嵐初次郎等を伴つて歸京し、金札製造方頭取、取締役、諸拂方以下が任命された事情を述べ、最後に製造高發行高を一覽表として示して居る、而してこの時代を受けた商賈の一人として、「明治の商工界に於ける五代友厚」（三浦周行、歴史と地理）は維新後從來の商工業者の組合は解體され、專賣事業の特權は消滅し、天下の大都市大阪でさへ非常な衰頹を見た時、青年時代に長崎に遊び更に上海に赴き國難に遭つて死生の巷に出入した先覺者にして且愛國の志士たる友厚が、官吏萬能の世に於て一般からは寧ろ劣等視されつゝあつた商工業の徒に下つた事を述べて其抱負と其識見の凡でない事を指示し、全國鑛山の開發又は製鹽事業に従事したのは營利事業ではあるけれどもまた國家的事業であつて、中には當然國家のなすべき事業を

民間に委ねて其損失を補助する意味の事業にも手を染めて居る。最後に最近華盛頓會議に於て四國協約が成立した結果二十年の長き歴史を有する日英同盟が自然消滅しなければならなかつたので、日英同盟に關する追憶が可なり行はれたが、就中「日英同盟の回顧」(原勝郎、外交時報)は國際諸同盟中最も有終の美を保つたものである。そして此同盟が二十年の間に、直接間接に世界全體に影響せる事の大なる所以を述べ、同盟が本來積極的の目的を有した提携であつたものが、終に消極的の意義のみ残さるゝに至つた列強の國際關係を詳説し、結局消極的の目的を有する四國協約に代られたのであるけれども、日本の利益の上には大した影響は來たさないと斷じ、而して其存續を盡つたのは我でなく、英國であつた事は、日本のために何よりも好都合であつたと言ひ、また「日英同盟史論」(匹田直、歴史と地理)は我國内の事情と歐洲及び東洋の政界の推移とを顧慮して此問題を説明し、同盟の廢止は亦我國のためには決して不利ではないと言つて居

る。次に吾人は法制經濟の方面に視線を向けやう。法制史に關したものとしましては、昨年の斯界を騒がせた牧學士對中田博士の論戰を挙げねばならぬ。先づ「文治守護の補任」(牧健二、法學論叢)は、明治元年十一月二十九日の勅許に依り、賴朝が諸國各地に守護を補任することを得たのは、義經行家追討使として、兩人の追討を完全に執行するが爲に、臨時的に軍政を行ふことを命ぜられ、補任權の授與に依つて守護權を委任されたのであつて、初めより永續的性質ある守護の補任が勅許されたものでもなければ、賴朝自ら諸國總追捕使(總守護)に任命されて居て、此補任を爲し得たものでもないと論じたのに對して、「牧學士の文治守護職の補任を讀みて」(中田薫、同誌)は、賴朝自ら諸國總追捕使になつたと言ふ舊説を支持し、十一月二十五日に於ける牧氏の所謂義經行家追討使補任の宣旨を以て、形式を具へた諸國總追捕使補任の宣旨なりとし、又二十九日に兵糧米の徵收を勅許せるは賴朝を諸國總地頭職に補任したものであると説いて駁撃を加へ、「日本國總守護及び總地頭」(牧健二、同誌)は先づ法律

資料の重要視すべきことを説いた後、二十五日の兩人追捕の主旨は一般的守護權を有する諸國總追捕使補任の主旨でなく、守護補任權授與が總守護權委任であつたこと述べ、更に兵糧米と地頭職とは全く別物であつて、文治の地頭は莊官としては土地を有したものであると論じた。是に於て「再び牧學士の文治守護職補任論に就きて」(中田薫、同誌)は守護補任の問題のみを論じて、牧氏の言へる諸國總追捕使は後年のものである諸國に互つて兩人を追捕する時は、それが諸國總追捕使であつて、二十五日の主旨は其補任形式を存すと言ひ、牧氏は追討と追捕との觀念を混同せる故其說成立せず爲し又一般的追捕を行ふと言ふ意味の後世の守護權は正權限たる兩人追捕以外に行はれた外部的結合の特殊任務權限が、義經自滅後も存続した爲に生じたものであると説き、「中田博士の教に接して」(牧健二、同誌)は當時追捕使頼朝が兵糧米を徵收權を勅許されたるは追討使と追捕使が實質上一視された證據であり、兩人追捕の爲に總追捕權を授けられたものが文治の守護であつて、守護に二様なく、文

治の守護は兩人の追捕を主たる事務とした點に於いて特徴があるので、かく解することに依つて守護に關する凡ての史料が始めてよく調和綜合されることを説いて討論を結んだ。

經濟的方面にては「平安朝時代の錢貨」(中村直勝、歴史と地理)が唐招提寺文書の中に貞觀錢及び饒益錢を實際に使用した賣券のある事を注意して前年寛平錢延喜錢乾元錢が通貨として使用された事を記した事を補つて居り、『五箇』といふ地名(倉光清六、民族と歴史)には肥沃な低地に於ける人々の増殖に伴つて從來荒蕪地として空しく捨てられて顧みられなかつた空閑地を追々開墾して時に空閑—ゴカミ呼んだ事もあらうし、さうした空閑地に漂泊氏が定着して村邑を作つたものもあらう、故に五箇は音を借りた假り字であるを推論し、「後院と後院領」(中村直勝、歴史と地理)は後院とは必ずしも天皇にのみ限つたものではなく其始めは皇太后太皇太后のためにも置かれたものであるとし、記録の上からは後院は仁明朝であるけれども恐らく嵯峨天皇御在位中に創め置かれた

ものであつて、後院領もまた同時に充行はれたる見なければならぬ。斷じ、後院の發生はやがて現はれ来る院政の先驅であり、後院領の存在は院廳領の成立を豫言するものであると言つて居る。「中世都市の發達」(三浦周行、經濟論叢)は前年より引續いて、まづ我國中世の都市の發達を見るには鎌倉時代から凡そ室町の初期迄を前期として室町の中世から豊臣時代までを後期とすべきであるとし、前期は古代都市の名残の尙失せやらぬ所はあつたが、其内に自ら興隆の基礎が築かれつゝあつたといつて第一に政治的都市の増加を指摘し其例として鎌倉の發達を詳述し第二に商業の進歩のために商人等の組合の出來た事を見、第三に社寺の保護を挙げ、其例として兵庫及び堺の興隆を教へ、室町時代の初期に對明貿易が行はれた、めに其影響として兵庫及び堺の外山口等が發展した経路を説明し、更に轉じて戰國時代の都市の勃興を語り、商業の殷盛と都市との關係を言ひ諸國の領主で統一の望を抱いたものは其事業の遂行上何れも都市や商人を利用したが、就中織田信長は其最たるものであつたとし、かく

て各地に成立した自由都市に於ては商人が中心勢力であつて堺の如きは南北の會合衆三十六人といふが如き自治體の莊官のあつた事を語り、其市民の富が幕府以下の好餌であつたが、商才に長けた市民は却てこれを利用して其利權を獲得するに成功したことを説き、「足利時代に於ける撰錢とグレシウム法」(渡邊世祐、史學雜誌)は足利時代の撰錢令及び其變遷を見て、撰錢が行はれ精錢漸く姿を消したので取引の三分一は必ず良錢を含有しなければならぬとし、更に五分一の割合に變へたが其効果が擧げられなかつたから、精錢と惡錢との比價を定めて共に通用させ家康後更に惡錢のみを使用させたと言つてグレシウム法が如實に行はれた事を説き、しかも商取引上左程の困難を來たさなかつたのは、錢の流通が充分でなかつた事、比較的良質の私鑄錢が出來た事、及び戰國時代の如きは世相の變轉が甚しかつたので精錢貯藏が充分に行はれなかつた事のためであるまいかと言つて居る。降つて「元祿享保時代に於ける經濟思想の研究」(中村孝也)は經濟政治と道德との關係より論じ起して、此時代の經濟

思想は總じて武家階級本位のものであるとし、經濟に關する根本概念、生産論、交換論、分配論等に言及して居る。「中村」

次に目を宗教、思想史の方面に轉するに、先づ神道の側では「我神代卷」に使用せられたる神の字の意義に就きて」（加藤玄智、中央史壇）は定まつた用法なく、人にも宗教的力にもこれを使用してゐるから、上代の神觀をして甚だ不明ならせてゐるといひ、「菅公の神號について」志田義秀、東亞之光）は天滿大自在天神といふ神號の天滿は菅神の本地佛十一面觀音が修羅道の能化者として大光普照觀音と言はれるから、其思想より思ひ附かれた事であらうし、觀音が衆生濟度の方便として應化する三十三身の中に大自在天があるから、それから大自在が出て、天神は天身の普通であらうと斷じ、十一面觀音を其本地としたのは菅公が流謫中、觀世音寺の觀音に繞つた關係上であるとし、「中古の神道に見る一傾向」宮地直一、中央史壇）は本迹關係に於ける反本地垂迹的傾向と權實神の思想の事に注意し、「六條新八幡宮の性質」同人、歴史

と地理）は前年發表された魚澄學士の研究の補遺としてその源家邸宅神であつたこの説を裏書きし、なほ京都に於ける武家の專祀の最初のものであつた事を説き「大内義隆の神道觀」同人、國學院雜誌）は大内氏が義興の時から吉田家と關係があつたが、義隆に至つて兼右と親交を結び彼を周防に呼下して多賀春日社等を勸請させ、神道行事の傳を受け、二十二箇條の質疑をしてゐるのは尋常の招福除災のみではなかつたので、他に類のない所であるとし、「三河に於ける徳川氏の氏神」同人、史學雜誌）は徳川氏の祖先が賀茂郡松平郷に起つた爲めに、松平一門は其地にあつた六所明神を崇敬したが同氏の勢力が岡崎に延びるに及んで、其他の六所明神及び甲山、伊賀の八幡を一は要害の爲め一は城郭の鎮守として崇敬するに至り、後賀茂郡六所明神の崇敬は衰へたが、岡崎の六所及び八幡はなほ榮え八幡は特に頭地を抜いてゐたといひ、「平田篤胤の神學について」森下眞男、藝文）は篤胤は宣長學系の人ではあるが學問は宣長はき純正ではなく、紀祀祝詞を綜合し、外教にも互つたので、その思想の中心は天

地開闢説と幽冥觀とにあつて、人の死後は氣的の存在として子孫を守るものとし、従つて祖先神崇拜になつたけれども、祖神以外の神をも認め、その恵みをも力説しながら眞の宗教的の體驗がなかつたといひ、又「平田篤胤の信仰」(補永眞明、中央史壇)は同じく神靈死後の生活、神憑等の信仰のあつたことから、祈禱の効力を認めてゐたことを述べてゐる。「黒住宗忠と井上正鐵」(河野省三、同誌)は此の兩人が我が固有の信仰の内から、始めて歡天喜地の宗教を説き出したことを説き「筑波山に於ける神佛分離」(竹岡勝也、國學院雜誌)は明治元年神佛分離布告の際、筑波山別當護持院の役僧等復飾して一山の社務を管領したが、殿輩と稱する舊祠官と衝突し、明治四年神社行政の改正、社領の土地等によつて解決した顛末を叙して居る。次に佛教に關しては例によつて多數の研究が現はれてゐるが、一般史或は教理史の方面では、「推古時代に於ける佛教の受容の仕方について」(和辻哲郎、思想)は當時の日本人は悲歎に對する慰藉を木石又は自分達の持つてゐる宗教的儀式の内に求めたが、其の經驗は

更に佛像を得、其の人間的な愛の表情を對象とする事によりて一層力強く進展させたもので、現世的ではあるが現世を限定する死を恐れ、佛教によつて死後の眞實なる生活を理解する様になつたといひ、「佛教史上より見たる日鮮關係」(手島文倉、宗教研究)は我が國佛教史上朝鮮より受けた影響を三國、高麗、李朝の各代を通じて詳細に述べたものである。「奈良朝の寫經と佛教の社會的影響」(津田敬武、同誌)は古寫經の願文によつて天皇又は父母の廻向の爲めに經典を書寫したものゝ多いことから、儒教風の治國齊家や祖先崇敬の思想の著しいことを述べたものである。「平安朝以前の密教と民間信仰」(宮城文雅、同誌)は密教の傳來は道慈律師に始まることされてゐるが大日經は道慈歸朝以後に譯せられたものであるけれども雜密は古くから傳來して居り、役小角は孔雀王法を越智泰澄は十一面法を修し、又史上屢十一面觀音、千手觀音が信仰されたことが見えて居つて、聖德太子の觀音信仰と現世祈禱の國民思想と相俟つて盛に流布し、殆ど奈良朝の民間信仰を支配して、空海の密教流布の地盤を築

いて置いたといひ、「四王寺ミ異敵掃攘の關係」藤岡繼平（歴史地理）は寶龜五年に新羅の入寇の災を攘はんが爲めに筑紫太宰府に四王寺を創め、蝦夷に備ふる爲めに秋田に同寺の置かれたのも同時であらうとし、其の後又新羅入寇の杞憂を抱いて西邊五國に四王寺を置かれたことを述べて其の遺蹟に及んでゐるが其中四王寺を四天王法等の密儀を修する所と見てゐるのは特に注意すべき點であらう。「鎮護國家思想、の變遷ミ傳教大師」（稻葉圓成、佛敎研究）は鎮護國家は單に不如法の僧の經典讀誦だけでは不足であつて、傳教大師は始めて籠山十二年の制を立て、僧伽の精神を樹立し菩薩僧を養成しかくして僧寶の威力によつて國家を安泰にしやうとしたので、菩薩僧の養成は修法の適任者を得ること、其人格を中心として風敎が維持されることによつて國家が安泰になること信じたのであるといひ、「初期日本淨土敎の傳播を述べて三經一論五部九卷の傳來に及ぶ」（高瀬承嚴、無礙光、佛敎學雜誌）は古寫經の題跋正倉院文書等によつて、淨土三部經及び往生論等の奈良朝以前に於ける流布を述べ當麻、智光

等の曼荼羅及び東大寺に於ける阿彌陀悔過に論及して平安朝以後の將來と認めらるゝ、九帖疏の奈良朝に存した事を證して居る「恵心ミ法然」（竹岡勝也、歴史ミ地理）は恵心の理觀の念佛から法然の口唱の念佛に至る迄の經過を述べ、其の變遷は時代の風潮ミ歩調を一にして貴族的な藤原時代には理觀の念佛が生れたが民衆的な平家時代以後に於いてはそれが生れ得なかつたといひ「東密の分裂」（赤堀又次郎、歴史地理）は東密の事相方面の系統が源仁の後聖寶盆信から小野廣澤の兩流に別れ更に各六流に分派したことを叙し「日本佛敎の側面觀」、辻善之助、中央史壇）は佛敎の墮落の側面を觀たもので、「奈良佛敎の今後」（大屋徳城、同誌）は祈禱敎であつた奈良佛敎が祈禱法の完成した眞言宗中に没入したことを説き「滿濟准后日記に現はれたる佛敎」（同人、佛敎學雜誌）は禪宗の頽廢ミ眞言宗が足利氏ミ結んで柳營に勢力を扶植したことを説いてゐる「存覺上人の敎義」（梅原眞隆、佛敎大學論叢）は存覺は聖道淨土歸一を説き法華受持の功德を認めながら彌陀の利生を説き、法華の理敎ミ念佛の事敎との別途の

世界の並立する事、諸佛出世の本懷は淨土門にある事、眞假の分判では鮮明に淨土の他流を簡別したけれども、不退、證果の釋では他の淨土家に應用したさいひ、「存覺上人の神祇觀に就て」(杉紫朗、同誌)は存覺が實在の承事を止め權社本地の利生世尊を尊び諸神の本懷は念佛にあるさいふ諸神本懷集の思想を承けてそれを訂補したことを説き、「疑心往生説の考察」(同人、龍谷大學論叢)は聖光は起行の疑心については往生を許し、雲山深草流の顯意は無信なるは凡夫の習、佛は無信をも捨てずさいひたが、信心爲本の眞宗ではそれは許されない筈である、けれども徳川時代になつて彦根の了雲は疑心往生説を立て、疑心は煩惱で煩惱具足の衆生には免れ難い事である安心だに一念決定した上は信後の煩惱は往生の障礙にはならぬさいひたことを説いてゐる。次に教會史、或は寺誌の方面では、「國分寺建立發願の詔勅について」(萩野由之、史學雜誌)は其の御發願は天平十三年であるを稱せられてゐるけれども、その月日は三代格と續紀とで違つてゐるが、詔勅中に秋篠の事をいつてゐるのは二月にしても三

月にしても叶はず、神宮増飾の事を去年さいひつてゐるのは十三年としては適しない、續紀十三年正月の條に國分寺の記事 見えてゐるから、恐らく十年の事であつて、十三年は條例發布の年であらうさいひ「東寺と高野山」(赤堀又次郎、歴史地理)は金剛峰寺は東寺の如く官寺ではなく空海が修禪の所として創めた私寺で、それを眞然に譲り、更に無空に譲つたが、無空は橘氏で、藤橘兩氏の勢力爭から藤氏の歸依僧なる東寺の觀賢の競望により爾來長者の管攝する所となつたさいひつて居る。「法然上人の淨土開宗に對する當時の非難」(望月信亨、無礙光)は南都北嶺の奏狀、高辨の摧邪輪及び莊嚴記の大意を述べて略評したもので、「隆寛成覺空阿三師の流罪に就て」(藤本了泰、佛教學雜誌)は安貞元年山徒の念佛者迫害より三師流罪の顛末を叙し、更に其の跡始末として念佛餘黨の所刑をせまつた時の交名を擧げて淨土門流の諸系譜に對照してゐる。「創立時代に於ける本願寺と地方門侶との關係」(長岡仙岳、中央史壇)は親鸞以來覺如に至るまで大谷一家の家計は常に東國の門侶の支持を受け、大谷御

影堂の擴張も又其方に依り、唯善の御影堂預職の競望にも門侶の勢力が認められ覺如存覺の不和も亦門侶との關係による所を述べた「本願寺の准門跡號勅許に關する研究」(淺野長武、史學雜誌)には本願寺が大永元年後柏原天皇御即位の用途を獻上して准門跡號を勅許されたといふのは誤で、其勅許は永祿二年十二月であるが、獻金は事實であつて其時紅衣を下賜されたといひ、次に僧傳に關するものでは、本年が眞宗の開宗七百年に相當するといふので、親鸞に關する研究が甚だ多く現はれたけれども、注意に値するものゝ割合に少かつたのは遺憾である又佛教大學論叢では存覺上人號を出し密教研究では覺海大德記念號を出した。先づ親鸞に關するものでは「本邦の二大宗教家」(村上專精、中央史壇)は親鸞と道元とを擧げて其の異同の點を列擧したもので「親鸞傳私見」(中澤見明、史學雜誌)は親鸞の俗姓を日野氏とするのは覺如の傳繪及報恩講式に始まるのであるが其の所説は年代が符合せず覺如の家系が日野氏であつて、自ら教團の中心とならうとし、又信徒中に門閥を尙ぶ一派があつた爲め

に、親鸞を日野氏として自分の一門としたので、其の傳繪を著作したのは親鸞を傳するよりはそれを假りて教義を述べ、淨土宗以外に親鸞を教祖とする別立教團を起さん爲で、其の記事中聖德太子法然上人の行狀を模した所が多いとし、親鸞傳の正確な史料として教行信證の後序を認め、これによつて法然の師弟關係を承認し、其一念義でない事を述べ、終に親鸞の傳記の明了せぬのは彼の性格によるので、又崇拜者が下賤なものであつた事にも基くだらうといひ「聖覺を中心としたる法然と親鸞」(松本彦次郎、史林)は聖覺は貴族出の宗教家だけれども時代思潮に共鳴した、彼は法然の門人ではなく、思想上では法然と親鸞との中間にあり、親鸞は聖覺の共鳴者として現れたのであるといひ「親鸞聖人流罪に就ての考察」(鷲尾教導、龍谷大學論叢)は其の原因を妻帯と同輩の陷穽にあるとし「親鸞聖人の常陸に就ての考察」(同人、佛教研究)は親鸞最初の室は常陸から上洛してゐた同行中の女なるべく、善鸞は其所生であるから始終常陸に暮したので、親鸞が越後から常陸に行つたのもその關係によ

るものであらうといひ「親鸞聖人ニ恵信尼公」同人、親鸞教は親鸞の室恵信尼が九條兼實の女王日姫だといふ傳説の出所を穿鑿して親鸞夢記の成玉女身の句から出たものだらうといつて居る。次に存覺に關するものでは「存覺上人ニ其時代」(三浦周行、佛教大學論叢)は覺如存覺の不和は祖父覺惠の愛孫に對する殊寵の爲に父子間の愛情に罅隙が生じたのニ教會組織の上から特殊の事情があつたからであり、其義絶の原因は門弟の存覺に對する渴仰の結果が、御影堂留守職競望ニ解された爲であらうが、覺如存覺の兩人は親鸞の遺德顯彰及び眞宗の教勢を中央に張る事に努力した點が共通であるといひ「存覺上人の修學」(禿氏祐祥、同誌)は存覺は日野親顯親業の猶子として文筆の教養深く、夙に進流聲明の本所なる東北院に學び更に興福寺西南院の交衆となり、又叡山に登り、審に餘乘を研ね佛教の基礎的學問をしたことを叙し「覺如存覺不和の原因に就いての一考察」(長岡仙岳、史學雜誌)は覺如に前後五人の室があり、存覺は最初の室播磨局の所生であるから、さういふ事情も其原因の一に數ふべきであら

うといつてゐる。日蓮聖人の人格及び事業(井上哲次郎東亞の光)に日蓮の人格の意志的な事及び傳教の後繼者として法華弘通に力めたことを述べたに對して「日蓮聖人の人格の二方面」(馬田行啓、法華)教理史上に於ける日蓮聖人(清水龍山、同誌)が共に日蓮は非常に情にうるはしい所があるを指摘し、井上博士の法華唱題の意義は甚だ不徹底であるといつてゐる。又「惠玄ニ其の時代」(川上孤山、中央史壇)には同時代の禪僧では夢窓は事的に成功したが、惠玄は眞に傳法に成功したことを述べて居る。佛教に關する典籍の研究も亦多數現はれて居るが、殊に先年金剛寺で發見された明義信行集ニ親鸞の著として、眞宗開宗の第一年を算定する基礎とされてゐる教行信證ニに關する研究が最も注意すべきものである。明義信行集を逸早く學界に紹介した橋川正氏は先年の研究の補遺として「明義進行集追考」(佛教研究)を發表した。「信瑞の明義進行集ニ無觀稱名義」(望月信亨、佛教學雜誌)も亦其解説であつて、信瑞が無觀稱名即ち散心稱名の義を述べんが爲めに先德の教義を集めたもので現存

の二三兩卷のみであるが、和語燈錄中の諸人傳説の詞や九卷傳四十八卷など此書に基いてゐる所多く、和語燈錄中に本書から引用した分に、今本に見えてゐない分は多分第一巻で、それは法然に關する分であらうといひ、「敬西房信瑞著明義進行集に就て」(伊藤祐晃、同誌)は進行集はもろ二三兩卷のみで、第一巻は黒谷上人傳所謂信瑞の一卷傳であつたらうといひ、「信瑞の法然上人傳」明義進行集第一に就て(井川定慶、同誌)は缺卷の第一は近頃醍醐三寶院から發見された所謂醍醐本法然上人傳であらうといつてゐる。「教行信證文類完成年代考」(鷲尾教導、佛教研究)は本書の著作については親鸞が元久二年に選擇集を書寫した時に立願し、法然の三回忌又は七回忌に完成するつもりが完成せず、元仁元年の十三回忌に化身土卷迄脱稿し、全部完了したのはその三十三回忌の時であつたらうとの推測説を建てゝゐる。併し「教行信證に關する疑問に就いて」(喜田貞吉、歴史地理)は最も教學界の注意を惹いたもので、教行信證の化身土卷の後序に承元法難の事に關して皇帝紀抄等によるゝ、法然は門下

の女犯に坐して流され門人は切離されたもので、流罪は法然一人であるのを、親鸞自身もそれに關係した様に記し、報恩寺本を始め自筆を稱せられてゐる諸本に、立派な文章を自ら誤て訓讀し、三代前の天皇を今上と稱する等の疑點を挙げ、その結果は勢自筆本の存在を疑ふ事なつた爲めに夫を辯護せんとして、「教行信證に關する疑問に就いて」喜田博士に答ふ(辻善之助、史學雜誌)は法難の記事については假令自叙傳であつても必ずしも事實に符合するものでないから巨難とするに足らず、文章の誤讀は親鸞の常習であつて、又今上といふのは當時の今上の意であるといひ、「親鸞聖人と教行信證」(本多辰次郎、中央史壇)は承元法難の記事を誤謬と認めず、皇帝紀抄に法然以外の流罪を擧げてないのは略記である、誤讀については辻博士も同意見で親鸞が有職學者でない以上、今上等の用語の不當なのは怪むに足らぬ、殊に鎌倉時代の教界に親鸞を描いて本書の如き深遠な著書が出来るものがないから、他人の偽作とするのは探る事が出来ぬといひ、「喜田博士の教行信證に對する疑義を讀みて」(廣

瀬南雄、佛教研究は教行信證の自筆の存在を認めぬ乍らも、本書の内容は決して他人の代作し得るものでなく、書中法華經や天台の觀經疏を一ヶ所も引用してゐないのは山徒の手になつたものでない證であるといつた。『教行信證について』喜田貞吉、中外日報は上の諸駁論に答へて、今度は問題を誤讀一點に集中して、辻、本多兩氏の例示された往生論註は伽才の文章を誤讀したもので、こゝには適切な例とはならぬといひ、自分の正しい文章をわざ／＼誤讀するとはさうしても考へられない事で、かく親鸞を正當な文章を誤讀する様な無學な人とするならば、本書の様な大著述がなし得るか、又親鸞が立派に讀書力ありながら、一時を糊塗する爲めにわざ／＼曲讀したとするか、又親鸞が本書の著者であつて、同時に報恩寺本等の筆者である事と兩立し得るとするかの三ヶ條の新疑問を提出し、これに對して「喜田博士の親鸞觀につきて」(梅原眞隆、親鸞聖人研究)は文章の誤讀は親鸞の常であるといひ、又親鸞は經論の要文を引用するに當つて獨自の讀方をするところがあるので、それを以つて一時を

糊塗する爲めに曲讀するを見るのは遺憾であるといつてゐる。其の他本書に關するものには「教行信證延書古寫本の研究」(日下無倫、佛教研究)がある。「選擇集の古版本に就て」(藤堂祐範、無礙光)は古版選擇集を網羅して解説し、「法然上人の三昧發得記」(望月信享、同誌)は圓太曆の記事によつて同書の原本は二尊院にあつたところから現存の記文につきて語燈錄と醍醐本法然上人傳とを對比して醍醐傳の方が信すべきものである事及び選擇集が建久九年法然の三昧發得中、淨土の莊嚴を眼のあたり見つゝ著作されたものである事を述べてゐる。西山派のものには「西山上人の觀經疏大意の研究」(上杉慧岳、佛教研究)及「西山の白木念佛の法語に就きて」(同人、同誌)等詳細な研究があり、眞宗側のものでは「親鸞聖人血脉文集私見」(梅原眞隆、龍谷大學論叢)に本書は僞選ではなく、性信が自分の血脉的傳を證する爲めに選集したものであらうといつてゐる他に、「現世利益和讃」(金光明經、稻葉圓成、佛教研究)は此の和讃に四佛所説の金光明經壽量品を彌陀如來化して説いたものとしてゐるのは親鸞の創

意で、經所説の釋迦の無量壽は其の本門なる阿彌陀の無量壽の開顯であるこの信仰に基くのであるとし、金光明經と對比して和讃の章句の基く所を明にしてゐる。「六要鈔」了慧の無量壽經鈔との交渉（小山法城、龍谷大學論叢）は存覺の六要鈔の中に引用されてゐる大經の末疏は大方了慧の無量壽經鈔からの孫引であるといひ、「御文章開持記」に就て（横井信空、同誌）は其の著者が越前太田平乗寺の功存である事を考證し、「御文御草本のこゝ」（日下無倫、佛教研究）は五帖御文は圓如の所輯であるが蓮如自筆のものとは字句に相違があつて大谷大學所藏の目筆本は五帖の御文に一致してゐることを説いて居り、又「縮刷大藏經の開板に就いて」（足利宣正、龍谷大學論叢）は島田蕃根等が縮藏刊行の盛事の顛末を詳記してゐる。翻つて我が國の基督教に關する研究は甚だ寂寞の感を起さしめるが、「切支丹宗門改めの心理」（姉崎正治、宗教研究）は徳川時代の宗門改は爲政者が信者の信仰心に對する無理解により、極度の抑壓を加へたが、それは却て殉教の心を堅めさせたので、幕府は切支丹を根絶したことを考へてゐる

たが事實は明治時代まで持越して居り、又その方法も幾多の惡徳を含み、害毒を世間に流したといつてゐる。更に儒學、其の他に關するものに移れば、先づ「花園宸記を拜誦して」（河野省三、國學院雜誌）は敬神愛民の御心深く、孟子を悦ばせ給ひ、儒學は儒學佛教は佛教として其の純粹を保持する事に愷愷を用ゐる給ふたことを叙し、「花園帝と漢文學」（岡田正之、斯文）も亦天皇の御讀書の該博なることを稱し、其御講學に讀談講授（授）見の法ある事を述べ、なほ論語には最も愷愷に注がせられ親しく抄出せられ、殊に御批評の精しいのは推服に堪へない所で、孟子に就て仲尼の道此書に委す後世必ず此文を翫ぶべしとの御豫言は見事に適中した、次で資治通鑑の治亂善惡遺す所なきを賞せられ我が國の史上の人物を品隋して賴長を貶し實資を掲けられた事を述べてゐる。「近世初期に於ける儒學の勃興について」（石原昌胤、國學院雜誌）は無學な太田牛一の雜記と一代の學者なる林羅山の文集とを同一に比較し、天道といふ語の徳川時代になつて著しく現實的になつたことを述べ、儒教勃興の源因は個性

の覺醒であつて儒教が理智を尙ぶ結果宗教と道德と分離し、神佛混淆が破れて却て神儒が結合したといひ、「武士道論」(河野省三、同誌)は武士道學派は小幡景憲に始まり北條氏長によつて哲學的基礎が築かれ、山鹿素行によつて倫理的基礎が與へられた、武士道は武士に限らず、武家時代に於ける國民道德の中心勢力で其の特徴は節義廉恥の觀念を基礎とする精神主義的生活を高調するにあるといひ、なほ「山鹿素行の遺著及び關係書に就いて」(加藤仁平、藝文)「大塚退野の生涯と其著書」(今村孝三、史林)などの紹介もあつた、教育制度については「大寶令に定められたる大學寮の教育史上に於ける意味」(高橋俊乘、哲學研究)は令制の大學を叙し、其盛なりしは平安朝の初期まで、あつたことを述べ、大學の出身者は官吏となるこの規定があるが其出身者のみが官吏となるのではなく、從つて大學を官吏養成所と見るは當らないこと、及び當時の私學は皆大學の別曹であつて、眞に學問をする所は大學のみであつたが、學生は大抵一人の師に就いた爲めに遂に私塾が榮えたことなを説き、「勸學院」(松野

遵崇、史林)は勸學院は藤氏の私學として起り、大學の南曹となつたけれども、全く獨立したもので、藤氏長者の管領する所で遂には其の家政の機關となつた、學生には學問料を給され學成つて秀才となり、歩、鹿島使等の行事がある、其の終末は弘安四年の顛倒の時であるが、其後再興したけれども、單に政所として小規模のものであつたといつてゐる。又科學方面では「文化史上より見たる日本の數學」(三上義夫、哲學雜誌)「日本理學の濫觴」(桑木或雄、大阪朝日新聞)があり、「和蘭流外科に就いて」(吳秀三、史學雜誌)は紀伊の華岡青洲に就いて述べたものである。又印刷術の方では「印刷事業より見たる我が文化」(龍窟、中央史壇)があつて百萬塔によつて示されてゐる如く、奈良朝以前の印刷術は官廳的で、且つ規模が小さかつたが、平安朝になつては宗教家の間に印刷術が起り、稍大部なもの印刷され殊に摺佛、扇面古寫經の下繪の如く繪畫が印刷せられてゐる、鎌倉時代には武士階級に迄波及した。當代までは主として宗教的であつたが、室町時代には世俗的のものも現れ融通大念佛緣起

の如き大規模の繪卷が印刷された。安土桃山時代以後には文化が全國的になつた爲めに、印刷術が頓に發達し活字版の輸入され、又嵯峨版が文學書印行の先驅をなしたが、徳川時代に文運勃興の結果一時に多數の需要に應ずる爲めに整版が發達し、朝廷及び幕府も印刷事業を獎勵したといつてゐる。

文學では先づ「萬葉集の歌と古今集の歌との相違について」(和辻哲郎、思想)は萬葉の歌は直觀的な自然を詠嘆するが、古今のは智的な概念の遊戲である、けれども其の内に自然の印象に觸れて人生を詠嘆する新しい傾向があるといひ「竹取物語に就いて」(長尾素枝、國學院雜誌)は此物語の題材は從來寶樓閣經等に求められてゐるが、それは餘り竹に拘泥し過ぎたもので、求婚された天女の難題等重要なる點が見遁されてゐる。其羽衣の話は搜神記、風土記等から出で、昇天の事は白鳥處女傳説であらう、此物語は單に滑稽小説なるばかりでなく遺瀨ない涙が含まれてゐるといひ、物語中の和歌の内には六帖又は古今集に關係あるから、延いては物語の出來た時代の研

究に資する所があらうといふ事を注意してゐる。又「お

伽嘶としての竹取物語」(和辻哲郎、思想)は津田左右吉氏が此物語を世態小説と見、神仙談は輕い滑稽の材料としてのみ必要なものだといふに對して此物語の世界は全々超自然でお伽嘶として見なければ眞に理解が出来ないといひ、「源氏物語について」(同人、同誌)は帚木の卷を始め所々に、全篇の結構を豫知しなければ意味をなさぬ語句の多いことを説き、既に世に行はれてゐる多くの光源氏の傳説又は物語を利用して出來たか又式部から院政時代に至る一世紀の間に後人の加筆があつたのかでなければならぬといひ、更に此の物語は全體として鑑賞する時は決して傑作ではなく部分的には巧妙なのと拙劣なのとが混在してゐるから一人の作者を有たす一の流派の作者を有つものかも知れないといつてゐる。「物のあはれについて」(同人、同誌)は源氏物語研究の結果から得た宣長の物のあはれ説は卓見ではあるが、文學の本意としては十分をまぬがれぬ、畢竟平安朝文學の特質と見るべきもので、此特質は當代の婦人が其の時代精神を代表してゐた

ここから起つたこと述べ、「宣長の物のあはれ」神ながらの道〔久松潜一、東亞の光〕は其の主旨主義の文學論に純樸なる古道説は共に契沖の思想から系統を引いてゐる事に注意してゐる。尙源氏物語に關したものは「河海抄の系統について」(山脇毅、藝文)「曼珠院本源氏物語」(同人、同誌)がある。前者は河内抄は河内本系統だといはれてゐるが、紅葉賀卷のみは青表紙系統であるといひ後者は青表紙、河内本二大系以外の耕雲本の紹介である。枕草紙について(和辻哲郎、思想)は此草紙によつて清少納言を品陞したもので、彼女の勝氣な事、男に支配されるのを嫌つて事た、享樂を冷靜に諦視した事、觀察の細微な事、デッサンの確な事等を數へ、其の描寫の技倆は横に豊富な印象を鮮にする事が出来ても、縦に心の推移を描く事が出来なかつたといつてゐる。宇治大納言物語について(宮田和一郎、藝文)は古物語の拔萃で、永享から文明の間に出来、作者は或は一條兼良であるらしく、題號は宇治拾遺の補遺のつもりであらうといひ「靈異記の研究」(橋川正、同誌)は本書が佛教說話文學の元祖で、三寶繪詞や古昔物語の系統の源泉である事を述べ、作者

景戒は恐らく紀伊人であらうといひ、法相學者とする世説を駁け、著作年代は弘仁年中で、而も其十四年以前であるとし、本書の藍本なる冥報記般若檢記について考證してゐる。此年は特に近松門左衛門の二百年忌を迎へんとして華々しき催しが多く、研究も相應にあつたことであらうが、我々はそれに接する幸福を有たなかつた。たゞ「近松初期の作品」(藤井乙男、太陽)は播磨櫓、加賀櫓、一中なきの正本中に署名のない近松の作が多くある事であらうとして其一例として鳥羽戀塚物語を擧げ、其の結構、用語等後の一心五戒魂と同じで、後者は其改作せられたものであるといひ、「瀧口横笛と娥歌留多」(穎原退藏、藝文)も亦古淨瑠璃の瀧口横笛は結構が近松の娥歌留多に一致してゐるから、恐らく前者も近松の作であらうといひ「會根崎心中と心中涙の玉の井」(藤村作、東洋哲學)は兩戯曲の類似點を擧げて涙の玉の井が前者即ち近松の影響を受けてゐる事を述べ、心中物の初作は會根崎心中で、涙の玉の井の出来たのを元祿十五年とするのは誤であらうといふのに對して「心中物の初作について請益す」(三田村鷹魚、同誌)は現存の玉の井は再演本で、

初演本に近松に影響を受けないものがあつたのではあるまいか疑つてゐる。「西鶴の好色一代男の成立」(山口

剛、早稻田文學)は一代男が西鶴の俳諧點者としての諸經驗を脚色したものだといひ、「秋の詩人芭蕉」(吉田絃二郎、同誌)は芭蕉の崇敬した西行は春の氣味をも味ひ、

人生を理解したが、芭蕉の文藝は徹頭徹尾寂味を主とした秋の詩であつたといひ、「茶、いふ人のこゝ」(萩原井泉水、同誌)は奇人一茶の奇行は無意義な因襲と虚飾とに反對して眞の人間として生活せんとした處にあるといつてゐる。轉じて「幸若舞曲の詞章に就て」(佐成謙太郎、

藝文)は曲舞の曲目を擧げて其個々の物語の系統を論じたものである。歌舞の方面では、平安朝に於ける舞踊について「櫻井秀、史料」は當期に於ける宮廷の儀式的舞踊としての踏歌、雅樂、五節を叙しそれが未だ全く固定せずして卿紳の間に眞に興味を以て迎へられてゐたことを述べ、「能樂の起源」(吳文炳、早稻田文學)は筆者が能樂の起源をなすものと考へてゐる田樂、宴曲、呪師等について考證し、能樂の起源は是等を研究しなければ明らかないものだといひ、なほ「日本舞蹈史」(岩橋小彌太)は

群集舞蹈が次第に古典化して行く經路を叙してゐる。

〔岩橋〕

更に美術、工藝の方面に眼を轉ずると、「佛像の相好に就ての一考察」(和辻哲郎、思想)推古佛の眼は比較的單純な孤であるが白鳳以後の佛象は其の様式化せる眼を寝れる嬰兒の眼との類似、また眼と眉との顔全體に對する釣合も、推古佛のは大人のそれで白鳳天平のは明かに嬰兒のそれであり、頬の肉づけに至つても推古式は意味ある表情を含んだ成長した人の頬であるが、白鳳天平の頬は柔かい嬰兒の頬であつて、しかも作者が捕へたのは嬰兒そのまゝではなく、嬰兒に現はれたる人間の體の美しさであり、其表現の様式は初唐の佛像を模範としたものであると言ひ「松尾寺の孔雀明王圖に就いて」(丸尾彰三郎、國華)は法隆寺本を平安朝中期と定め、原家本が之に次ぐとし、美術學校本、安樂壽院本を鎌倉初期とするならば、松尾寺本は其の中期の作とし、河野家本を其の末期として製作年代を限る事が出来ると言ひ、原家本の色彩の華麗と形式の輕快と生き生きた孔雀明王圖は、描線の克明と趣調の莊重を特色とする松尾寺本へ推移し、茲に鎌倉時代の形

式的な描法に主意的な思潮を代表させ得る言つてゐる。「福井氏所藏の東北院職人歌合に就て」(藤懸靜也、同誌)は職人畫繪卷の流布本中の頗る古いもの、一つで、足利中世を稍や下つた時代のものであるとし、曼殊院のそれは遺存する最古の者で深く祕庫に納められて居つて、模本も流布せず、福井氏のそれは曼殊院のとは別系統のものであるとし、「歌舞伎草紙に就て」(同人、同誌)は徳川侯爵家、京都帝國大學附屬圖書館、及び大阪中村福助氏所藏の歌舞伎草紙を研究し、此草紙の出來た時代は山三の亡靈が描かれ居る事より考へて慶長十二三年より末年までの間で、當時に於ては今日推思するよりも遙に普及したるものであらうと言つて居る。

今年には地方誌の出版されたものが多々あつたが、その中に於て福井縣史(牧野信之助)が第三冊及附圖を出して完成した事は最も著しいものであつて、特に港灣・都市・經濟の關係や、宗教・政治との關係に意を注いで地方文化の痕を闡明した事は此種編纂物中の出色のものである事を否む事が出來ない郡誌中、近江蒲生郡誌(中川泉三)

ミ攝津東成郡誌は前者が件別に、後者が町村別にして其の變遷を詳略に記録した事に於て、且つ彪大なる事に於いて併記さるべきであらう。其他には京都府葛野郡誌(橋川正)や福井縣遠敷郡誌(磯野實惠)等が完了した事を祝福して最後に史料に關するものを擧げる。「興正菩薩叡尊の自叙傳について」(橋川正、史林)は近く洛北松尾の葉室淨住寺で披閱した叡尊の自叙傳「金剛佛子叡尊感身覺正記」に關して其内容を紹介し、佛教史料としても亦交通史料としても社會史料としても優秀なものである事を列證し、本書の選述は弘安八年筆者八十六歳の頽齡に及んで何時示寂するかも測られぬこいふ念慮から一代の行狀を綴つたものであるとし、國書刊行會の印行した「關東往還記」に關しては大森金五郎氏の弘長三年の記事であるこの推論は同書によりて證明さるゝと共に、其筆者は叡尊に常隨した性海比丘であり、「舊鈔本慈鎮和尚傳」(神田喜一郎、同誌)は其所藏の正應二年七月三日書寫の奥書ある慈鎮和尚傳一卷を紹介し、筆者が和尚の遺弟であつた事を指摘して居る。豐臣秀吉の「一花押に就て」(中

村直勝、歴史と地理）は京都寺町頭阿彌陀寺文書にある九月九日附折紙の中に見ゆる秀吉の花押から其の花押の時代と共に變化した痕を辿り花押の變遷によりて其個人の社會的地位等を考察しやうと試みたものである。日本史籍協會は「九條家國事記錄」「丁卯雜拾錄」「巢内信誓遺稿」「連城紀聞」を出版し、東京帝國大學文學部史料編纂掛は「大日本古文書」時代別の十五、家わけの第八毛利家文書の二及三、幕末外交關係文書の十五を「大日本史料」は第一編之一、第五編之二、第六編之十九、二十、第八編之八、第十二編之二十を發行した猶は終りに木崎愛吉氏の「日本金石史」が出来た事、岩井武俊氏の「日本古建築菁華」が第三冊目を完了した事を併記して置かう。「中村朝鮮史」斯界の研究論著の昨年度に於ける趨勢は一昨年度よりも多種であることが特徴であらう先づ學術問題に就て見れば、「李栗谷の學說」（越田三郎、哲學雜誌）は近世朝鮮の學風は殆んど朱子學であるが、就中李珥栗谷は一切の現象は二氣の動靜に因つて生じ、氣は消長するも太極には消長無く、太極を陰或は濬一清虛の氣と見る時

は太極は有限さなり相對上の名目となり、從つて樞紐となる根柢實力を有せないものとなるも、太極は斷じて抽象的でなく、現象と本體とは融合無間であるから理論上二者の間に時間的關係は成立せないと説明し、氣を除外する二元的見解に陥らむとする弊を極ふに全力を努めたこと謂ひ、「朝鮮の二賢哲李退溪と崔濟愚」（有馬祐政、東亞之光）は、退溪が朱子學を宗として王陽明の知行合一説に似た學説を有し、崔濟愚は東學教、大道侍天教の開始者として重きをなすを謂つて居る。「文廟に關する調査」（小田省吾、朝鮮）報告は李朝太祖三年高麗の制に倣つて崇教坊に建てた文廟火災の後太宗七年に再建され、宣祖二十五年兵火の後同三十四年重建された詳細及び現狀を敘述して居る。次に佛教關係のもので「朝鮮寺刹の研究」（高橋亨、同誌）は朝鮮伽藍の特色として、概して深山幽谷に存在する事、檀家の皆無なる事、寺有財産の收入で維持して居る事、祈禱依頼者の稀に來る外、俗人の出入殆んど絶無なる事、所屬僧侶の數多き事を挙げ、近來の無學念佛者の激減、青年僧侶の向學心の勃興、其の社會化、祭典費の節減、布教究學費の僧額、増侶の位置向上の諸傾向

を叙し、寺は多く曼荼羅に富み、宗派の色彩鮮明でなく道教の影響の大きいを謂ひ、「佛教史上より見たる日鮮の關係」(手島文倉、宗教研究)は百濟佛教と日本の關係で聖明王以下の十六項、新羅佛教と日本との關係で敏達帝八年に日本へ使した眞智王の使以下の十二項、及び高麗佛教と日本との關係に論及して居る、歴史地理問題では「己汶伴跋考」(今西龍、史林)は嘗て吉田連家譜の己汶と日本書紀の己汶とは同名異地で、前者は甘文なるも後者は蟾江津江流域に在らむを考へた事に疑問を生じ、今では書紀の己汶は全羅北道の南原であらうと思ふが他は明にし難い。伴跋は己汶の隣地で今の星州の本彼縣即ち新羅末期の碧珍郡に當り、伴跋と碧珍とは同語であるといふことを證して居る。「文祿役に所謂古都の辨」(伴三千雄、歴史地理)は立花文書の朱印狀中に見ゆる赤國は全羅道であつて、京城退却の我大軍の一時滯留した古都は鍋島直茂譜考證所見の傳城の記事吉見家朝鮮陣日記等より見れば、尙州に擬すべきであるを謂つて居る。更に特種問題研究に至つては、「箕氏朝鮮傳說考」(今西龍、支那學)

は此の傳説は漢代の史籍には極めて簡單で、魚豢の魏略に至つて急に詳密なると共に事實存在したと同様の勢力を半島政教上に及ぼし、百濟新羅は別として王氏高麗李朝は最も之を尊崇し、支那文化を欽慕する一派に對峙して箕子尊山の一派を生じたことを論じ、「箕子朝鮮傳説考」を讀みて(稻葉岩吉、同誌)は樂浪韓氏が箕子族祖説を有したのは元來此の種の古傳説のあつたからである。此種の論文には「朝鮮神教源流考」(李能相、史林)、韓衣考(石村貞吉、風俗研究)、我が上代の人名研究に參考となる「朝鮮童名考」(稻垣光晴、民族と歴史)、「朝鮮考」(太田淳、歴史地理)などがある。「朝鮮の文化問題」(稻葉岩吉、東亞經濟研究)は總督府の方針と古傳説との調和を叫び、「新羅葛文王考」(今西龍、藝文)は葛は骨と同一くして親族家族の義で、文は *mun* で身體の義であるから葛文王は親王の意であるが、中古以來は死後の追封王號となつたけれども、上古は生時の稱號に止まつて居た事を論じ「新羅骨品考」(同人、史林)は聖骨、眞骨、六

頭品の由來を詳論してこれが新羅本來人の專有であつたことを證して居る。足利時代に日本の居留地たりし朝鮮の三浦に就て(三浦周行、朝鮮)は熊川の齊浦、東萊の釜山浦並に蔚山の塩浦の開港の経緯より當時三浦に於ける日本人居留地の狀況の詳述であつて「日鮮貿易史上の三浦と和館(武田勝藏、史學)と略々同じ内容の調査である。又「歳條送使船に就て(同人、同誌)は修好貿易上宗氏の使者の渡鮮した歳條送使船と規外送使船との區別を論じ、尙ほ受圖書船も通航したことを述べて居る。慶尙南道陝川郡伽耶山「海印寺大藏經版に就て(宮野銀八、史林)は其の銘文の戊申歲が成宗穆宗文宗時代論說あることより高宗時代論說あることより高宗時代説の妥當なるを論じ、其の理由として、高宗の十一年以後三十八年間は無年號時代であるから單に干支のみを使用した例甚だ多い爲であること謂ひ、尙ほ其の増雕と目錄追加の年次、崔瑀、崔阮の功績に及んで居る。史料批評には「三國史記高麗紀の批判(津田左右吉、滿鮮地理歴史研究報告第九)と「高麗顯宗の即位に關する高麗史の曲筆を論ず」

(荻山秀雄、東洋學報)との二篇がある。前篇は該紀事中支那史籍に材料を取らない部分に如何ばかり確實な古史料を包括して居るかに着眼し、便宜上、建國説話、國王の世系、支那と交渉の記載、他の異民族との交渉記載、國內の事情に關する記載の五項に區分して考究し、國王世系は高句麗傳來のもの、建國説話地名人名には新羅人の潤色の迹見え、其他は大抵新羅人高麗人の腦裏より造篇したものであらうと謂ひ、後篇は、穆宗の生母千秋太后と金致陽との關係は叛者を惡む敵本主義より曲筆多きこと、麗初の新羅人の潛勢力はさして強くなかつたが妖僧金氏の叛謀があつて新羅派は驟然として穆宗を助け其の領首崔沆は祕に新羅派再興の策を畫したこと、新羅派が失敗を憂ひて兵力を以て目的貫徹を謀つた爲、王が新羅派、金致陽派の兩方より迫害されたこと、顯宗の即位するに新羅派は巧に陰謀を隱匿して高麗の社稷を全うした諸真相を叙べて高麗史の曲筆を指摘して居る。其他紀行には「慶州の二日(小田幹治郎、朝鮮)がある。「那波」東洋史 年と共に發達する我が東洋史界の趨勢は其の發

表せらるゝ研究論著の篇數の年々増加するを以てしても略其の一斑を揣摩し得らるゝのであるが、特に昨年度は近頃五六箇年の趨勢より超越して稀有に多量なる篇數を示し二百五十餘篇に達した。これは支那研究が邦人に必要なることの一般に知悉されて學者を促した爲でもあり又學者が非常に熱心に眞摯に東洋學研究を爲し其の結晶の現はれた爲でもあらう。先づ時事問題の主なるものより觀るに「支那の門戸開放に就て」(末廣東雄、法學論叢)は支那を列國の經濟的活動に對して平等に開放し均等なる機會を確保せしむるの必要なるを歴史的に論じて、一八九八年のマツキンレー大統領の此の主張が其の翌年國務卿ヘー氏の提議で主義として認められ、其の擴大する所は一九〇〇年の英獨協約一九〇二年以來の三次の日英同盟協約、高平ルット協約石井ランシング協約日露協約で先づ日英露國の之を承認したことを叙して居り、殊に日支關係については「支那より見たる日支經濟關係」(木村増太郎、東亞經濟研究)「支那人の排外思想」(石山福治同誌)があり、後者は排日の流行の極は將來も外國人全體

を排斥するに至るべきを論じて居る。廣東人「新支那」(田中萃一郎、同誌)は民國七年秋に發端した廣東人の革命が廣東人をして政治上思想上に其の眞價を發揮させ新支那の將來を卜すべき現象であるを論じて居る。總括的論說では「支那現代學界一斑」(小柳司氣太、斯文)「中華民國第十年史」(滿鐵調查資料第六編)等の外に「支那の國民道德」(小柳司氣太、斯文)を論じて北京大學教授梁漱溟の東西文化及び其の哲學を鈔錄批評したるは「梁漱溟著東西文化及其哲學」(岡崎文夫、支那學)と併せ讀むべきものであり、その他「支那の國家及び社會」(矢野仁一太陽)は支那は近世的國家でなくて國境線すら無く、徹底した平和主義で、富國を鄙し、外國の存在を認めず主權者、領土、國民の關係組織を爲さず、從つて社會も政治階級も庶民階級も對峙したものであるを論じて居る「マルサスの支那人口論」(田中忠夫、東亞經濟研究)は支那巨大の人口は土地肥沃、農事獎勵則ち親耕兵の寓農、荒地開墾食用品の多種、結婚が祖先祭祀の繼續、種族の増殖の爲であつて其の結果は生活難の激成を促し饑饉疫病

棄子殺兒等に依る積極的制限、貧民奴隸の避婚に依る豫防的制限行はれて居るも遂に支那一般を貧乏化せしめたを謂つて居るが、我國と共に歐米文化を採用しながら支那に於ては失敗と紊亂を招く淵源は實に支那の國家と社會とが分離して歐米文化を咀嚼するに適せないを謂つてゐる「支那社會の本質及び作用」(稻葉岩吉、同誌)の説明と併せて注意すべきである。民族、性、問題に於ても「支那國民性瞥見」(常盤大定、丁酉倫理學講演集)が尊大、事大、虛僞、放任、打算、陰險、投機、堅實、偷安、退嬰、服命、殘忍、平和、無關心、雷同各性の實例を挙げ利己的、個人的、平等的、世界的性の之に對立せるを指摘して居るのは、「老子教の支那國民經濟に及ぼす影響」(益富忠郎、東亞經濟研究)の農民階級に特に著しく、無信仰にして老子の宇宙觀運命觀人生觀に歸依する支那國民は皆隱遁的快樂主義を謳歌し低級な自己満足に甘んじ勞働者の目的にも社會國家の爲に奉仕するが如き考なく、彼等の貯金も生慾滿足の手段に過ぎざることを謂へるを併せ讀むべきであらう。更に政治、經濟問題を概見するに、「支那古來の關

税と現行關税」(大村欣一、東亞經濟研究)は歷代の商稅、明清の鈔關、清末の釐金、工部の木關市舶司及び海關の沿革を討ねて裁釐加稅問題に及び、「支那法と奴婢」(東川德治、法學志林)は犯罪、賣買、投棄、家生の四種原因に依る奴婢は國法之を認め、何れも家政幫助の重要な機關であつて其の多少は其家の貧富を卜するに足るものであると論じ、「荀子の政治思想」(吳虞、支那學)を批評したるは、「法家の理想とする弱民政治」(小島祐馬、同誌)が國家の利益と人民の利益と相一致せざるを認め、人民は國家の利益の爲に其の手段として存在すれば、國家を強くせむには人民を弱むるを肝要とすを商子に見ゆる通り、法の力を以て強制的弱民策を實行すべきを謂へるに「支那の古典に見はれたる社會政策」(田島錦治、經濟論叢)を採ねて均平の語原、周禮所見の社會政策の意義より管子が富の集中の原因を論じ本業末作説、穀物貯蓄穀價調節策を叫べるに及べるに、皆好文字たるを失はない。「支那近代政治の起原」(稻葉岩吉、朝鮮)を五代に擬する説もあれば、尙書周書所見の諸官名と周禮、龜甲文所見の

それとの間に支那古代官制發達の徑路を見出さむとする「周朝官制瑣言」(那波利貞、支那學)もあり、王道を唱ふる「孔子と管仲」(狩野直喜、同誌)の霸道を批せる孔子の言に前後不一致の點あるは、これ後人が孔安國の註に誤られたものであり、兩漢の鄉舉里選法より隋唐の進士法なる間を維ける「九品中世考」(岡崎文夫、同誌)は延康元年頃に起り、反對者なる劉毅、衛瓘、李重の輩には熱心に非難せられたることを指摘するものもある。「支那の家族制度」(清水泰次、國家學會雜誌)は祖先崇拜を謂はむよりは、寧ろ利己自衛より生じ、其の結束に依りて盜賊の害を防ぐなどの効果あるも、其の弊害も多量で政治的にも社會的にも此の制度の必要なる支那人自らが其の之あるが爲に苦しみたることを謂へるも興味ある研究であり、直隸省無極縣古莊村の孝八家に於ける「支那に於ける大家族の一例」(諸橋轍次、斯文)を参照すべきであらう。支那の土地問題は特に論著が多く、昨年度斯界の一特徴であつたが、「唐代の土地問題管見」(玉井晃博、史學雜誌)を述べて先づ古代井田制の崩解、均田制の起原、其の組織を

論じ、殊に唐時農業立國主義に基く階級思想の堅固であつた事情を證明して均田制の崩解は之に實質貼貨の自由を認めてあつたことが、莊園の發達と相俟つて玄宗より代宗の初治世中に全く瓦解するに至つたことを論じて居るは、清朝の中頃迄公然行はれた質入不動産の回贖權を永久に存続させる習慣が、早く唐初の均田制度に不動産の質入を許可してあつたに起源することを論じた「唐代に於ける不動産質に就いて」(加藤繁、東洋學報)の研究、及び「唐の均田法に就いて」(岡崎文夫、支那學)之が理想的に實施されたならば、井田法に優る法であるけれども唐の郷帖の郷は里で其の計帖の正不正は全く縣吏の公心の有無を以て定まるのであるから、其の正確な施行は期し得られぬも兎に角私有財産を認むる法と平行施行させることに依つて唐初の社會に一般的安靜を齎したであらうと謂ふ說、並に「宇文融の括戸政策に就いて」(同人、同誌)唐の玄宗の爲財源を立てむとして宇文融が賦税を輕め力役を重くした政策が事功の計畫者としては賞賛に値せる才幹を有すと謂へる說など、何れも密接なる關係

ある研究である。その他、所謂徹法の意義に就いて天下通法、萬世通法、通算、通力、徹取、無常額、十夫共同耕作、都鄙鄉遂貢助通用の諸説の無意義なるを論證して餘夫問題加藤氏の周代土地不易問題に論及した「支那古代田制考」(橋本増吉、東洋學報)の如き、將た「明代の皇莊」(清水泰次、東亞經濟研究)の創始に就いて英宗の天順八年憲宗の成化元年の二説あるも結局は同一時のことで、而も深く其淵源を洞察すれば正統より洪濤の頃迄溯り得べく、後に至つて之を廢め畝毎に一定の銀を徵集する策、又不當の沒收に係る皇莊を故の所有主に返す策講ぜられたのも其支配者宦官の爲に亂され、遂に明室滅亡の源を開いたことを謂へるが如きは、「支那農民の生活狀態」(澤村幸夫、同誌)を叙して、古來重農主義を重んじた支那農民が却つて貧窮せる現象を起したことを謂へると共に土地問題經濟問題に關した代表的論著さすべきである。道教の「善書中の社會政策其他」(同人、同誌)につき其の荒政に關するもの、飲食上の注意書に關する方面に社會政策に觸るゝものあることを謂つた、支那の「社稷

の祭祀と領地領土の觀念」(田崎仁義、國家學會雜誌)に新見解を立て、社稷の起源を農業經濟時代の極初期に起るとし、其の部落間の境界線にて圍まれた内部が領土で部落の氏の長者が其の住地の域内に生命の本源神たる宗廟と共に生命の維持存榮神たる社稷をも祭祀するは自然であり、従つて社稷に領土、又は領地の意を有するに至つたであらうと謂へるもあれば又内地に鑄造された「支那の金銀錢に就いて」(和田清、東洋學報)其の最も確實なる最初は金の章宗の銀錢承安寶貨であるが、宋史劉光世傳には宋の高宗の時早くも金銀銅の招納信寶錢鑄造の事の見ゆるのみならず、癸辛雜識にも兇賊が宋朝諸帝陵を發掘して金錢萬枚を獲たことがあるから、之が鑄造は南北朝唐以來の()で Woodward 氏が上海に獲たる正德通寶も眞物と推定し得る理由を述べたるに對し、「錢莊の發達に就きて」(及川恒忠、東亞經濟研究)、見ても之は五代北宋時代の兩營業より發達したもので夢梁錄には金銀塩鈔引交易舗の名現はれ、清の道光五年政府法規を制定したが辛亥革命で一時打撃を受け、更に民國二三年頃よ

り復興されて今や支那經濟界に樞要なる職務を遂行せる事情を詳述せるものもある。「唐宋樞密考」(加藤繁、東洋學報)も亦之に關聯せる研究で、樞密の名は早く晩唐の詩人溫庭筠の乾牒子の中に現はれ、唐宋二代に存在した一種の商店で其の名は堅牢なる權を作つて人の財物を保管するに起り、商人の要求に依つて起り、商人に利用されたもので、樞密寄附舖の帖は小切手で今日の銀行業を形成する一要素と見るべきものである。往時の常平倉、義倉、社倉と其の性質を異にする「預備倉と濟農倉」(清水泰次、東亞經濟研究)は前者は明の洪武年中に設けられて、人民困窮の場合に、米穀を賑恤して、都合のよき時に無利息で回收する官民合同の事業であるが、其の弊が長するを利をさる爲富人に貸與することゝなつて茲に宣德七八年の頃に後者が起つて前者の破滅を救つたのである。「蒙古に於ける露西亞と支那」(矢野仁一、外交時報)は清朝は早く支那人民の蒙地開墾を禁じたれども、蒙漢雜居の區域廣大するに及んで交渉案件續出し、且つ露西亞の南下勢力の壓迫を感じるに至るに遑に主義を一變して

殖民實邊の政略をこり、漢人の蒙古移住を獎勵し、蒙古懷柔策として喇嘛教を優遇し、光緒三十二年遂に理藩部をして蒙古藩屬の狀況を調査させたが、蒙古は却つて露西亞に依頼して清朝を離れ遂に獨立したことを述べ「滿蒙藏は支那本來の領土に非る論」(同人、同誌)も、支那人の考では支那帝は世を支配するから、世界何地も皆支那領土と思惟する理論と事實との境をなす點に於ては所謂邊疆の地を生じ、從つて邊疆なる滿蒙藏は支那政府の力が及ばんで放棄した地であるから領土と謂ふに足らぬと評し、之に關聯して「支那の土司に就いて」(同人、支那學)、康熙雍正以來改土歸流の策を實行した故湖北、湖南の如き腹地の土司は迹を絶つたれども、雲南、廣西、青海、西藏等邊疆地方には尙ほ之が現存し、支那人には猶ほ純然たる領土の如く考へらるゝも、果して然かく考ふるここの妥當なるや否やを疑つたものもある。尙ほ讀通鑑論、宋論、黃書、噩夢の諸書より「王船山の經濟說に就いて」(小島祐馬、同誌)彼が干涉主義を持すると共に放任主義をも認め、豪商を抑へて貧富の懸隔を去らむこ

した考のあることを證明したのもある。次に思、信、仰、問、題に就いて見るに、「古代支那民族の祖先祭祀」(松本信廣史學)、「上代支那に於ける天及び上帝の觀念」(津田左右吉、東洋學報)の二篇は古代に關係せるもので、前者は支那人の考では死者の魂は上昇し魄は肉體に遺存すを信ぜられ、宗廟に木主を立つるも祖先の魂魄を馮らしめぬ爲で之が民族信仰、社會生活の中心となり、氏族の團結政治法律藝術等一切の文化皆祖先崇拜の搖籃中に育まれたことを謂へるもので、正に「支那古代祭戸の風俗に就きて」(狩野直善、支那學)之が孟子時代迄一般に行はれた支那古俗で匈奴苗族の風俗とも共通し、其の配享の人を懷ふが爲に古くは天地社稷山川の祭祀にも立てられたことを謂へる説、並に「儒教より見たる靈魂論」(岩垂憲徳、東亞之光)に靈魂の不滅を信じ其の感應の要諦たるもの、誠の力に在ることを謂へる説を參照して讀むべきであり後者は天は目に見ゆる天より抽象的天となつて情意を具備する生者の如く考へられ、上帝は天の概念より出て、其處に存在する如く考へられた精靈を拔出して指せる

もので、自然若くは自然に存する理法でも謂ふべき意義を有すると共に、時に人間らしき形を想像せらるゝが其の働は支那人の間に特殊の發達をなした政治的道德的意義を具へて人を支配すを考へられたものである。これ亦「儒教の天命觀」(宇野哲人、斯文)が宋儒によりて天を哲學的に見られし爲、古代に於て天を宗教的に見たる儒教を天命觀に變遷ある事を謂へるを參照すべきである。孫星衍の説に據るに、現存の墨子は以て墨子學説を盡せるものに非ざれば、却て荀子等に見ゆる説に基いて、墨子の毀禮は禮が彼の上下同等兼愛説を容れなかつた爲であることを知り、其の勞農實利主義が許行の如き互助的無政府主義を謳歌するに至つた緣由をば「荀子を通じて見た墨子學説の閑却されたる一面」(吳虞、支那學)を題して披瀝したのは「法家と儒家との關係」(本田成之、同誌)、「老莊とアナキズム」(遠藤隆吉、哲學雜誌)關係なき、考へ合はすべき研究である。老莊とアナキズムとは其の性質を異にするを謂ふ服部博士の説を駁する理由は實に老子の道の根本的に實踐的にして無政府主義な

るに存するか如くである。而して「莊子に就ての若干の認識論的考察」(三枝博吾、斯文)を加ふれば逍遙遊と齊物論の二篇最も興味がある。前篇はカント、後篇はヘーゲルの思想に酷似する所見え、従つて「老子の吾等に遺した教訓」(小林一郎、東亞之光)は何事も改造すべく小刀細工を思む教である。「朱子の禮説」(浦川源吾、哲學研究)に對して日本從來の學者の注意は多く朱子の形而上學倫理學の方面に偏するけれども、朱子の經學上の功績も亦決して些少なからざるもので、其考へた禮意義は天理の節文であり、其三禮の研究には歸納的方法を適用して禮の改作を企てたものであり、「朱文公特に其の我國に及ぼせる影響」(宇野哲人、東亞之光)を見れば彼の學は勿論孔孟の原始的儒教と其の趣を異にし、特に我に影響せしは其の居敬窮理の説と春秋學とである。「司馬遷の歴史觀に就いて」(本田成之、支那學)考察するに、彼の考は最も五帝本紀、伯夷列傳、留侯世家に現はれて居つて、尙書に見えない黃帝顓頊五帝の實在を信じ、偉大なる人生觀より人生の真相を描寫批評するを旨として居り、「支那文藝に

溢れたる高踏的氣味」(青木正兒、同誌)は儒家が世俗と妥協して阿世の傾向へ陥つたに反し、道家が厭世より超世へ向つた爲に起つた氣風であつて屈原、賈誼が皆獨善の個人的自由を絶對に享樂し、謝靈運、陶潛が高踏的藝術の基を立て、文士氣質の一要素を醸成するに至つた徑路を論じたる「明代に大成されたる功過格思想」(高雄義堅、佛敎大學論叢)は古く抱朴子に見ゆる思想で、明の袁了凡の陰陽錄、雲棲大師の自知錄に至つて徹底的に民衆化したことを論じ、袁了凡は孔先生より得た一種の宿命觀に満足したけれども雲棲大師は功過格によつて此の思想に理論的説明を加へたことを謂へるは、致良知、知行合一、の要義の發揮せる「王陽明の論語解」(三島復、斯文)と共に明代思想界に於て注意に値するものである。「支那現代の思想界に就て」(小柳司氣太、丁酉倫理會講演集)文學革命の結果、從來の貴族文學、古典文學、山林文學が排斥されて、形式上よりは言文一致、内容上よりは必しも文學と道德と一致することを要めざる風は陳獨秀、胡適之、蔡元培諸氏の最も主張する所なるを謂へるも興味

がある。昨年は孔子の二千四百年忌に當り、東京大阪等にての祭典が行はれた爲に、孔子問題の研究論者が例年になく多數に發表されて居る。「孔門に於ける我的道德的自覺に就いて」(成田衛夫、東亞之光)其の方法として持敬行恕、克己復禮を仁に達する方法を謂ふがあり「孔子教に於ける實行の價值」(飯島忠夫、斯文)は正しき智見に依りて私慾に打ち克ち道德的行爲を成立するに存し、「孔子教の特徴」(服部宇之吉、同誌)の理想主義なるは、以て今日の物質主義の弊を救ふに足るべく、「孔子の教育」(服部富三郎、同誌)は人格圓滿なる所謂中行者、其の志高遠にして働の伴はざる所謂狂者、知識深けれども不義に與せざる所謂狷者を以て教ふべしとし所謂鄉愿は教ふべからずといひしも、「孔門の學風と現代の教育」(塩谷溫、同誌)を比較するに周代孔門の教育方法は個人教育にて師弟の關係密接であつたから現代教育の智育に偏せるは憂ふべきであり、従つて「孔子をして現代に在らしめば」(松本洪、同誌)正に社會の救済者たるべく、「孔子教の本領」(秋月胤繼、同誌)は實に修己と治人に在る。

然らば「孔子の所謂君子とは何ぞや」(宇野哲人、同誌)を謂ふに、德行、智德、情德、意德、知命の人であらう「孔子の人格事業及影響」(成田衛夫、同誌)の如何を概観すれば政治家であり、道德家であり、教育家であり、「漢文學史の上より見たる孔夫子」(岡田正之、同誌)も亦時中調和の形式を文章上に適用し文辭と思想とを兼ね、實用と美的とを併はむとせし精神のあることを看取し得べく、「予の孔子觀」(桑原隲藏、同誌)は孔子の一生平凡で不斷の努力を以て非凡の位置に到達したもの、其の人格は頗る圓滿で、其の經歷に秋毫も奇蹟なきを證明されてゐるのは、「孔子の學問と人格とに就て」(井上哲次郎、同誌)其の若年は哲學思想濃厚ではなかつたが晩年之に興味を覺え、其の人格は圓滿に發達したるを謂へるに共に、大抵所見が一致して居る様である。「孔子の思想に現はれたる宗教的要素」(加藤玄智、東亞之光)は其の天を説くに於て宗教味を帶び、神に對する信仰を有し天命を信じた他方に於て之を妨ぐる反對思想ありし爲教を成立するを得なかつたことを述べ、孔子の文が個人的社會

的を問はず内徳の美しさの現れたるものなるを謂へる「孔子ミ文」(柿村重松、斯文)以下「孔夫子に親しまむ」を要す(安藤圓秀、同誌)、「孔夫子の偉大なる點に就て」(手塚良道、同誌)、「思想界に於ける孔老二派の陵轢」(兒島猷吉郎、同誌)、「孔學管規」(山田準、同誌)、「孔子は天皇萬世一系主義を抱持せらるゝの說」(細田謙藏、同誌)「偉大にして高貴なる生涯」(松山直藏、同誌)、「孔子ミ儒教」(神谷初之助、同誌)、「孔學の眞髓」(平沼騏一郎、同誌)、「皆孔子祭典を記念せるものである。祭典に關しては「釋奠に就いて」(佐藤廣治、藝文)は其の古義を論じ、釋奠は報恩の意味より出でた祭祀であつて、釋菜、釋幣ミ其の根本義を異にし、之に常祭ミ臨時祭ミあるミ共に釋奠ミ謂へば恰も孔子の祭のみを意味することゝなつた經緯を叙し、聖像使用の可否問題に論及し、元來は像を使用すべきではなくて、其のこれを使用するは佛敎の影響に據ることを批評したるがあり、又「文廟の從祀及び清代尊孔御書匾額につきて」(中村久四郎、斯文)文廟釋奠祀祭の哲位以下の先賢人の時代的移動出入を詳述し、併せ

て清の康熙二十四年御筆の額を下賜されて以來の勅筆の歴史を説明したるものもある。齊の稷山の孔子廟に參拜したる「稷山遊紀」(田中逸平、同誌)も「孔老二夫子史跡踏査」(常盤大定、同誌)ミ共に昨年ミしては有意義の文字であつた。佛敎問題に於ては先づ「釋迦牟尼佛」(村上專精、東亞之光)評論があり。釋氏は頗る惡時世に生れたが、其の盛徳の然らしむる所、惡時世は却つて釋迦をして世界の大聖人たらしめたる所以であることを論じ、居る「羅睺羅跋陀作の法華略頌に就て」(岡教遠、哲學雜誌)近頃西藏より將來せられた梵語は從來未發見の珍本で西曆八九世紀頃の寫に係り、其の法華頌は八音四句より成る輪盧迦詩の韻律で二十頌あるミ謂つて之を和譯し、作者の何人なるかを論じて居るのも、又「二十唯識論の藏漢兩譯に就て」(明石慧達、龍谷大學論叢)其の第二譯第三譯が眞諦ミ玄奘なるミこも疑ひなきも第一譯は菩提流支なるか般若流支なるか不明ミせらるゝが、兩流支は同一人であらうミ言語學的に研究したミ共に、學界に裨益を與ふるものであらう。不拜王者問題に對し晋の何充は不可改、

桓玄は可改の説を提出して以來唐代迄紛爭した「支那前期佛教に於ける對外問題の一史料」(山内晋卿、歴史と地理)を指摘したのは、「支那江南に於ける造寺の起原」(佐々木功成、佛教大學論叢)を調査して、後漢の靈帝の建寧三年に始まり孫吳時代に盛んになつたことを豫章の東寺、武昌の昌樂寺、慧寶寺、建業の建初寺、四明の德潤寺、金陵の瑞相院、保寧寺、蘇州の通玄寺の沿革に徴して知るべしと謂へるに共に有益なる研究であるが、「元初に於ける帝室と禪僧との關係に就いて」(圀下大慧、東洋學報)憲宗時代海雲禪師の顧問になつた時、道佛二教の論議は化胡經出版問題より道士李志常、僧僧福裕の間に猛烈となり、第一回より第三回に亙る討論にて裕長老勝利を得たこと、後に世祖の至元十八年道教禁止の勅發されて二教の紛争は終了したる事、將た海雲禪師の世祖にも優遇されたことを論じ從つて國初數代間の元朝の背後には禪僧の流動注意に値し、元の佛教を喇嘛教のみと思ふことの謬見なることを指摘せるは、其の「補遺」(同人、同誌)に實要抄の寫本に就きて解説し其の作者は必ずや

佛典以外の本草關係の記事は經史證類大觀本草を底本として筆寫したることを謂へるに併せて、元代禪僧の一端を察するに足りる。其の他其の中心思想の般若空義に存し其の空に對する見解も羅什入關以前に於ては道安と共に變遷なることを論じた「支那佛教史上に於ける支遁の地位」(高雄義堅、支那學)の一篇は、其の學が新來の佛圖澄より出でないで、後漢以來熟し來つた支那佛教に出で老莊儒學と佛經とに通じたる爲、老莊の語を以て佛理を述へ、其の學風の慧遠に傳はりたる「支那思想史上より見たる釋道安」(武内義雄、同誌)の一篇の姉妹を爲し、「西藏佛教の特徴」(河口慧海、中央史壇)を擧げて、其の地勢食料乏しく、人口繁殖策としてサースムと稱する一妻多夫主義行はるれば、佛教は性慾享樂の祕密佛教なるが、西曆七百年より一千二百年佛教の亡ぶ迄約五百年間の佛教歴史は西藏佛教に據つて僅に續ぎ得たものなりと謂へる、「古龜茲國洞窟壁文ミシヤム・ブハラ國佛教」(寺本婉雅、佛教研究)と題して該洞窟内の藏文緣起に徴し、猶太教の流行、觀貨羅に時輪説の盛であつたことを知り得れ

ば、親貨羅緞茲西藏の三國交通があつて文化の促進に資し得たことを知るべく、又摩訶教が龜茲に流行して遂に佛教と混合し摩訶を以て佛の化身とする本地垂迹説も起りしを證し得れば、親貨羅とシヤム・プハラ國との關係略々之も知るこゝが出来ると論斷せる、二つながら西域佛教消長の迹を探る要諦である。東印度の文化には印度、支那、波斯、アラビアの外來影響多く近時南方印度東南亞細亞方面の金石文の研究の進むに従ひ、益々之が明となるの望あらむとて「印度の東漸と東印度諸島最古の碑文」(移川子之藏、史學)四種則ちボルネオ島の東部 Kooi 州の Moera Kanna にて一八七九年に Hoii 氏の發見したものは皆八世紀頃の Palava 王朝時代の頌德碑文であつて、今は河内東洋學院博物館内に珍藏する由を傳へて居るのも此の方面に深き注意を拂はざる邦人にきりては有益なる紹介である。次に藝術に關するものにては音樂に於て「シヤムの笙に就て」(田邊尚雄、東洋學藝雜誌)日本の笙と同種類の樂器なる Pian は十四本の小管より成り音律研究上頗る貴重なる價值あることを謂へる

「笙の音律と琵琶の音律に就て」(羽塚啓明、同誌)體源抄所見の也毛二管の音律の双調斷金であり、計、卜、の音律は鸞鏡、勝絶の二音なることを論ぜる、「支那の古琴」(山川早水、支那學)の沿革を調査し其の曲目並に北京現在の古琴家李晴坡、王心葵、賈峻山三師を紹介せる、將た「臺灣音樂考」(田邊尚雄、學藝)を綴りて臺灣本島人の樂日支那北方樂主要部分を占め、北管に劇樂、小曲、民謠曲、ありて、孔明祭七星燈、張松獻地圖、孫夫人祭江李陵碑、南天門の如きは皆劇樂なるを論じたるがあり。繪畫に於ては「支那の繪畫」(伊勢專一郎、單行)の南宋以前の主要なる遺品に就いてその間に流るゝ支那繪畫發展の徑路と作品の示す意義とを論じたるがあり「歐米に於ける東洋の古美術品に就て」(瀧精一、國華)ボストン博物館に平治物語御所燒對一卷、大德寺五百羅漢中の十幅、六朝の菩薩像石刻觀音石像、法華堂根本曼荼羅、北宋朱銳華の蜀山圖、董北苑筆平林霽色圖、李成筆雪景山水圖支那陶磁器各種あることより、歐洲に於けるスタイル、ベリヨ兩氏の將來品、佛國ケクラン家の陶磁器に言及した

るがあり。又「燉煌出引路菩薩圖に就て」(同人、同誌)其の構想の奇抜なるは佛畫として破格のもので、唐末五代の畫ならむと推定し「スタイン氏の齎らし歸れる燉煌千佛洞出の古畫に就て」(同人、同誌)同氏將來の二百餘點の繪畫は大部分紙本にて唐末五代以後の作品豊富なるにより、支那畫ならざる奇異の作物二點あることを注意し之には何れも梵銘があるが印度字なるや西藏字なるやは明かでない、其の他の多數は佛畫であつて我が天壽國曼荼羅に通ずるもの多く、畫中の物品は考古學的考證の資料として價值あると共に婦女の風俗資料なるものあるを指摘して居り、其の一例として「燉煌出唐畫毘沙門天圖に就て」(同人、同誌)我が平安朝佛畫に類似したものを紹介する所があり、畫論としての「唐朝の墨畫」(同人、同誌)は吳道子の白描墨畫に起源し王維張璪の砂墨を経て王洽の潑墨に至り唐朝墨畫進展の迹を概観すべく、「李龍眠と白描體附五馬圖卷に就て」(中川忠順、同誌)畫繼に李龍眠丹粉を使用せずとあるを證明し、清室所藏の五馬圖卷の如きは其の代表作であつて、韓幹の馬法に得たる所ある

を論定して居る。其他文人畫に就ては自樂の境涯を獲て詩的でなければならず又其の筆法に書法的傾向を必要とするを指摘したる「文人畫と表現主義」(瀧精一、同誌)がある。彫刻に關しては「アジヤンター石窟寺の彫刻文様に就て」(澤村專太郎、同誌)二十九個の洞穴の中第十三、十二、十、九、八、の諸洞を除けば、皆紀元後百五十年頃の作、之に次ぐは四世紀より六世紀の中華其他は六世紀の中華より七世紀に互つて開雕されたもので、大體毘訶羅、支提の二種類に分れ、第一期の裝飾文様は印度最古系統、第二期は繪畫的文様を加味するに彫刻的風潮を含みたる新時期の萌芽あるを認め、「西印度ナールシックに於けるゴータミーブトラ窟に就て」(同人、史林)其の前面裝飾が凡て建築構造を以て意匠されて後世の洞窟壁柱彫刻文の前驅をなしたことを注意し、之が毘訶羅洞の建築的精神と其の様式との發展の一轉期にて欄楯門様の彫刻は古代印度建築史上の諸問題に暗示を與ふると共に西印度彫刻の源流のガンダラ彫刻と無關係なるを證すべきであるを謂つて居る。其他特殊のものには「書體の沿革」(山田

謙吉、支那研究）、「女詞人李易安」（鈴木虎雄、藝文）がある。後者は洛陽名園記の著者李格非の女、趙明誠の妻なる彼女が、夫の死後張汝舟に再嫁したることなきを證し、其の文才は蔡琰、薛濤、魚玄機の如き字句の修飾に走るものではなくて、己の體驗を讀者に同様に體驗する如く感ぜしむる點で支那閨秀中第一流なる所以を證して居る。

「唐代の泥像に就て」（濱田耕作、歴史と地理）其の起源は六朝に存すと謂へる。「宋窯赤繪盃に就て」（奥田誠一、國華）從來其の眞品なるは李王家博物館所藏の小盞二點ベトログラード人類博物館所藏十世紀頃の壺斷片、英國博物館菊繪盃の數點に過ぎなかつたが、今此金の泰和の年號銘ある此の盃は其の年紀の確實な點に於ては宋窯赤繪研究上唯一の貴重資料である。又柴汝、官、哥、瑩龍泉定、均、耀、磁、建、廣、東、碎器、唐邑、鄧州、餘杭麗水以下の宋代の二十八窯を概説せるは「宋窯述略」（那波利貞、歴史と地理）である。文化史方面に於て特筆すべき總論は「概括的唐宋時代觀」（内藤虎次郎、同誌）で唐代が中世の終末に屬し、宋代が近世の發端にて其間に五

代と謂ふ時代を有し、貴族政治より君主獨裁政治へ、實物經濟の濃厚なる傾向より貨幣即ち銅錢使用の重んぜらるゝ傾向へ、注疏の學より一己の意見を立つる學風へ、文選風の文學より俗文學へ、壁畫より屏障畫へ、金碧山水より墨繪へ、舞樂より雜劇へ、移る過渡期をなせるを謂へるは、「唐宋文化の過渡期を論ず」（那波利貞、東亞攻究會會報）に文化史が時間的空間的に有機的聯絡を有することより、内政對外關係地理上の複雑なる有機的關係の差異により唐宋兩文化の性質に異同を來した理由を述べ、唐文化の貴族的であつて、宋文化の平民文化なる所以を論じ、其の過渡期たる五代五十餘年の文化現象に徴するに繪畫の題材、文學、音樂、法帖、等の傾向に隋唐の文化の餘芳を繼承する點あると共に宋元文化の先驅をなす點あるを指摘せるに偶然にも全く同一の研究對照を取り扱つて居る。「支那に於ける宗教の推移と文明の轉回」（常盤大定、東亞之光）を觀察して前後兩漢は道佛提携して魏晉の老莊時代を出現させ、南北朝時代の慧遠と冠謙との二派對立して文明が回轉し、隋唐に至りて之

が完成し、宋の禪學にて更に回轉新儒教を醸成したことを謂へるも、「漢代の生活と文化」(松井等、東亞經濟研究)を論じて虛榮的厚葬婚禮盛に流行し生活程度は向上せるも貧富の懸隔漸く著しく而して富者横暴の原因の商業の隆盛に基けることを詳説したる、將た「支那古代の文明」(阪谷芳郎、斯文)「唐朝女子の花子及其花細の關係」(宮本楷衣、風俗研究)の各篇と共に興味ある文化問題であり、更に北宋の印刷界が雍熙、端拱淳化、咸平、景德、天禧年中に於て特に開版の書多かりしことより、南宋の官版、宋代の坊刻書に説及し、其の種類として監本、家塾本、書棚本、州郡官刻本等二十六種を説明せる「宋代の印刷文化」(中村久四郎、歴史と地理)は「支那の活字版印刷につき」(同人、斯文)及び支那雕版源流考に見ゆる唐高宗永徽六年所刻の阿毘達磨大毘婆娑論なるもの日本に存在せる誤の記事を指摘し延いて傳教版開寶勅版等に言及せる「唐宋版本雜話」(新村出、歴史と地理)と共に印刷文化の總覽であり、「印度文化の復活」(武田豊四郎、中央史壇)が西洋文化の弊なる個人、權力、利己各主義を

排して將來の世界的新文化建設に適當なることを論じて居るなど文化史方面の研究も隨分賑やかであるが其の特種問題の研究に至つては實に昨年斯界論文の過半數を占めて居る。試に之を時代順に概觀するに、「支那古代の農業神」(田崎仁義、國民經濟雜誌)は太陽崇拜に起源し神農の人身牛首は農業用の牛馬に對する俗信の結合したものであると謂へるがあれは「山海經より觀たる支那古代の山嶽崇拜」(神田喜一郎、支那學)の山中の怪獸畏怖より起るを謂へるがあり、「支那五岳の由來」(稻葉岩吉、同誌)を訪ねて泰山は齊の長城の一部であるから封禪は防禦事業の一であらう恒山は中國の邊界を限り、嵩山は漢武の制定、衡山は漢武が讖緯家の言に基いて定めたものであることを論ぜるもあり、「長城築造の民族性心理學的考察」(那波利貞、同誌)を試みて長城を以て單に外敵防禦の爲と解して疑ふべき三理由を挙げ、國即ち都邑都城なる支那人の民族性心理より見れば長城は都市の擴大されたものと解すべしと謂へるがあり「支那古姓ミトミテミズム」(松本信廣、史學)を論じて左傳國語詩經所見

の三十七經の中、嬀の母猴、姜の羊、羸の怪獸、辛の羊、熊の熊、などの如く將た風雲などの如く動物天象に起源せるものあるを指摘してトーテムの痕迹を認むるに足るを謂へるがあり、「七夕物語」(新城新藏、學藝)が現在の二星の位置を背馳する點あるを見れば此の物語の成つて後河鼓を牽牛と對立したことを指摘せるがあり、「干支五行説」(顯瑣曆)(同人、支那學)の間には必然的關係無く、五行説は戰國中期に成つた五星の知識から起つたもので、春秋時代に其の萌芽があり、尙書甘誓の五行三正の句は春秋末期以後、皐陶漢の五辰の句、洪範の水曰潤下の句は戰國中期以後の考であるを謂へるは、「支那古曆法餘論」(飯島忠夫、東洋學報)で夏小正の天文現象は西紀前二百年前後の事實に合し、北斗の建子の意義、二十八宿の起源、甲寅元始干支の制定に對し別個の意見を立てた説を對峙して兩々論諍に耽り、「日の吉凶に關する迷信」(新城新藏、東洋學藝雜誌)に時日に固定した萬人一樣に同様とするもの、誕生の時日に依り各人の運命定まるものもあるも、其の大部分は干支五行説より出で、何

れも起源來歴は杜撰で取るに足らざることを謂へる「周易に就て」(宇野哲人、哲學雜誌)卦爻の一一は男女兩性に基き、陰陽二元と天地人三才に由て八卦を生じ、八卦中の各二卦を組合せて六十四卦を生ぜるものを見るべく、之を太極兩儀四象八卦と一二四八の順序に發展したものと考ふるは後世の數理的説明に過ぎないから占筮著策も理智的に判斷するのではなくて神意を奉伺するに在りて謂へるあれば、又「易に見はれたる階級思想」(小島祐馬、支那學)を察して易は自然の秩序と人間社會の秩序との間に共通の法則行はるを謂ふ觀念の上に立てば、甚だ妥協性あるを謂へるもある。近思錄元の雜劇中に初見する社會の文字に今日の意義でなく或る神を崇拜する人民の團體が其神を祭る爲に特定日に會合する意味で古典に於けるを異ならざることを論じた「社及社會考」(浦川源吾、哲學研究)、社の種類其の表示を論じて「次雌社考」の説を批評し、稷の由來を論じた「社稷の研究」(松本信廣、史學)、春秋魯隱公八年、史記廉頗傳の記載より春秋戰國時代の民屋に瓦葺の行はれたことを知り、石索所見

の鄧宮の瓦は戰國以後のものに過ぎないことを論じた

「支那に於ける屋瓦使用の起源論」(那波利貞、支那學)

詩經の三星を參星と觀、此星の現はるゝ冬季は收穫後に農閑時なれば此頃を以て周人の婚姻の行はれることを

論じた「詩の所謂三星と婚時」(佐藤廣治、同誌)の如き、

「支那古代家屋の屋内區劃の様式に就いて」(那波利貞、同誌)古く切襖式家屋に我が大社式間取の實行せられたこ

を篇文の解釋上より論議した如き、或は「詩經發展の徑路より見て采詩の官を疑ふ」(青木正兒、同誌)ものが

あり。或は食人社の俗稱を以て春秋に見ゆる齊の次雎社が山東土着の妖神祠にして茲に支那古代人が人を犠牲と

した痕跡を留むることを推論した「次雎社考」(那波利貞、藝文)があり、先秦、漢以後唐の中世、唐の中世以後現代

と「支那音韻の三大變」(蒲田新造、同誌)のあることを證明し將た史實に背馳したに係らず繪畫上西曆十世紀中葉迄其の存在を溯り知り得る「虎溪三笑說考」(那波利貞、同誌)で潯陽三隱説の訛傳したのものであらうと論じた特

殊問題中の特殊問題があり、「六朝時代の文藝批評家に就

いて」(本田成之、支那學)劉勰の文心雕龍を擧げ、「支那

婦人の社會的地位に就きての歴史的考察」(那波利貞、歴

史と地理)を試みては後漢末より塞外民族中原に移住し

胡俗の支那婦人間に流傳するや唐に至つて騎馬、胡帽の

流行、結髮化粧大に發達し唐代の婦人の位置高められ、

母に對する服喪が父と同等となり、宋に入りて皇族間に

も婦に二適の途を開きたる等、今日の支那婦人の覺醒は

其の來由する所根柢深きを論じたるがあり。「三史循吏傳を讀む」(岡崎文夫、支那學)時は循吏の意義法刑に任せず

身を以て民を化するの意なるを知るべく、「後漢書方術逸民兩傳の序論に就て」(同人、龍谷大學論叢)見るに、此の

二傳は決して范曄の獨創ではないが、彼の見解を察するに方術傳上卷には災異、圖讖、占候、占星の者を、下卷

には養生、醫術、幻術の者を加入し、逸民には後漢代の世俗の好尚を知るべきもの多く、兩者共に當時の人が個人の内面に向ひし傾向あるを知るべき材料である。之は

「抱朴子に見えたる漢末の風俗」(同人、支那學)に徴しても發明する所があり。「前漢の經學」(本田成之、同誌)は大

體形名法術に陰陽災異の二派に分れ、唐の武德五年隋法に則り秀才一人進士四人を採りしに始まる「唐の試験制度」詩賦（鈴木虎雄、同誌）との關係を見れば七十六科、五十九科なぎの中、主として進士科が唐文學隆盛の原因を爲せしを知るべく、「唐の府衛制に就て」（岡崎文夫、歴史と地理）見るに十二衛羽林將軍の制はあるも常備軍の内容は陝西、山西、河南西部の人民のみより組織せらるれば大軍出征の不便あり「支那人を指すタウガス又はタムガシの稱呼に就いて」（桑原隲藏、史林）は從來 De Guignes, Richtlofen, Hirth, 白鳥博士に説あれども、其等の各説は皆それ／＼缺點があり、之を唐家子の音とするに於ては、唐の國威、唐家の語の慣用、音韻上の諸理由より最も妥當なるを覺ゆるのみならず Theophylactus Simocatta の記載は明に南北朝のころを指せるなるを論證したのもある。元の二大道士邱處機と張留孫（高桑駒吉、東亞之光）の中、前者は成吉思汗の招聘に應じて長生藥を提供するに乘じ道教布教の目的を達した者で、後者は世相が彼を懷柔して人心收攬に資したるを利用して、正一教

興隆の基を立てし者である。此の外漢代の銅虎符、木傳信、繡符戰國魏の虎符、竹使符、より歷代の符制を研究し元朝に於ける其の効用、特典、世襲、濫用、出納、牌名の特徴を述べたる「元朝牌符考」（箭内互、滿鮮地理歴史研究報告第九）、南北朝以來五代に亙る迄斷續的に支那文物の輸入せられたる「契丹人の衣食住」（松井等、同書）の中其の固有風俗を闡明したもの、「滿鮮萬奴の國號について」（池内宏、東洋學報）元史太祖本紀、聖武親征錄所見の東夏と高麗史の東眞とあるに對し、東夏は彼が蒙古に叛した以來正式國號、東眞は彼の高麗と交渉を生じた後高麗人の附與せし副稱ならむを推定したるもの「葡萄牙人の支那渡來顛末」（矢野仁一、東亞經濟研究）について葡萄牙人の廣東驅逐後一旦貿易廢止され、其の復興せらるゝに至りても葡人は排除せられたる事情より説き起し、明代市舶司、葡人の浙江福建に於ける通商殖民事情を詳説したる、之と併せ見るべき史料の取扱を論じたる「矢野博士の葡萄牙人渡來顛末の一節に就いて」（後藤秀穗、史學雜誌）の諸篇以下「マカオの關關と割境問題に就て」（矢野仁

一、東亞經濟研究）支那人が連華墾闢設定の理由としてマカオの食料を支配し境界を定むる爲なりと謂ふ説を疑へるなき、何れも注意すべき論文であるが、更に「清朝初期の繼嗣問題」（内藤虎次郎、史林）につき清朝最初の習慣は最後の正妻の子を以て繼嗣とするを常とするが創業時代の事情に拘束されて軍民に人望のあつた太宗が立ち、其餘望は其の子の時代迄勢力ありし譯で蒙古人が遺産相續ミ汗位ミを別問題として考へたミ同じく多いミ述ぶる、「清初の直隸侵略戰に就て」（矢野仁一、歴史ミ地理）太宗前後四回の侵入、之に對する袁崇煥孫承宗の態度、毛文龍の殺戮事情を詳説した「香山麓の石欄ミ金山の明景帝陵」（同人、同誌）を見て前者が乾隆全盛時代の記念物であり後者に對し英宗瓦剌被擄中監國ミなつた功績を偲べる、「胡適之君の新著亭實齋年譜を讀む」（内藤虎次郎、支那學）、「先秦學術史上に於ける中庸の位置」（武内義雄、同誌）「支那に於ける攝政」（服部宇之吉、太陽）、瓜哇語ならむミ推定せる「更紗の名義」（新村出、同誌）「支那の温泉に就て」（山崎百治、支那研究）の如き類愈々出で、愈々有

益であり、「盛伯義遺事」（内藤虎次郎、支那學）は蒙古世系表の著述問題、怡府の書籍襲藏問題、阿禮堂遺書整理のこゝを述べ、「支那社會の階級鬭爭」（稻葉岩吉、太陽）は古く有姓者無姓者の爭より周末商人擡頭に基く貧富者の爭奴隸制度の出現を謂ひ、「胡床につきて」（藤田豐八、東洋學報）支那人は後漢迄皆平座したが、魏晉以來牀榻發達して椅子式の坐法行はれた詳細より胡床は後漢末に外國より傳來せしならむミ論じ之が魏晉の頃戰地、獵場、樓上、船中の場合に限られて使用され、摺疊式の椅子であつたミ謂ふは、「支那の開國に就て」（矢野仁一、史學雜誌）海禁を嚴にするこゝあるも鎖國はなく、天子は天下萬國を統治し他國を認めざる考の上に立つ支那に於ては、南京條約の如きも夷狄を驅逐するの意に外ならざるに、外人は之を開國ミ考へた爲頻次の戰を生じた所以を述ぶるも共に面白い論著である。「宋都汴京の繁華」（那波利貞、歴史ミ地理）は孟元老の東京夢華錄に基いて市店雜鬧の様子を詳述し、「楷樹の説」（有山泰吾、斯文）は子貢所植の孔席の楷の黃棟樹又は黃連茶なるを指摘したるもので

ある。次に史料の批評紹介に就て觀れば、九州二十州四至諸説、山脉の詳細、貢職の物名より「禹貢製作の時代」(内藤虎次郎、東亞經濟研究)を論じて禹貢を編成した材料の中には戰國時代以前のものであるが、其の組織は戰國以前に溯らしむることが出来ぬと判定したる、「論語季氏篇首章の本文に就いて」(小島祐馬、支那學)魏書張、普惠傳、春秋繁露、漢書食貨志所引の文句より校勘を試みたが其の他「禮運考」(武内義雄、同誌)「左傳引經考證」(小島祐馬、同誌)「漢書食貨志上に就いて」(岡崎文夫、同誌)がある。「支那古文書の研究」(神田喜一郎、歴史と地理)は高階遠成の告身書の様式を論じ、「孫子十二篇の作者」(武内義雄、支那學)は齊孫子なるべく、「正倉院藏藏二舊鈔本に就きて」(内藤虎次郎、同誌)杜家立成、王勃集の來歴を論じ、「梁皇侃論語義疏に就いて」(武内義雄、同誌)皇疏に二系統あり且つ之に邪疏の竄入あるを謂へる、「慈覺大師の入唐紀行に就いて」(岡田正之、東洋學報)大師が長安にて會昌の廢佛に際會せる爲、其の記事の詳細なる、新舊唐書等史籍の缺を補ふに力あることより、道教信

者李德裕が武宗を翼賛して還俗柅寺、僧尼檢括を行ひたる詳細、朝廷對宦官の反目、等五ヶ年間の徑路を知るべき好史料と評せる、「唐廣明元年刻老子道德經」(武内義雄、支那學)が河上公本にして、我慶長頃の活字本の河上公本に近きを證明し得ることを謂へる、太宰府發見の「舊鈔本翰苑に就きて」(内藤虎次郎、同誌)其の内容が蕃夷部なる爲、史料として貴重なる所以を論ずるのがある。「新に發見せられたる涅槃經の疏」(池内宏、東洋學報)は昨年七月朝鮮全羅南道松光面の松廣寺にて發見せられたる此の疏が唐の沙門法寶のものなるを論證してある。尙ほ弘道書、荒書、燕峰詩鈔をあぐる「費密的遺書」(小島祐馬、支那學)、光緒九年より民國八年迄に「六變せる廖平の學説」(同人、同誌)を批評せる外、「于闐國史の批評に就いて」(寺本婉雅、同誌)もある。論著の純評には、梁啓超氏の中國歴史研究法を読む(桑原隲藏、同誌)と常盤博士著古賢の跡へを読む(武内義雄、史林)とがある。前者は梁氏の説は大體妥當であつて殊に史料の鑑別批判を重視せるは賞賛すべきが、其の通史の長所のみを鼓吹せる

點、朝鮮日本の史料を參考すべき必要あるを知らざる點
日本人所作の東洋史支那史を罵れる點、外國書所見の史
實が支那史料に明記されあるを知らざる點、居庸關の六
體刻文を誤れる點等は推服すべからざる大缺點なるを指
摘し、後者は建初寺を報恩寺に擬する説の妥當ならざる
を駁し、同泰寺、法寶寺、鷄鳴寺同所異名説を提出し、
清涼寺、牛頭山に就ても駁する所がある。更に歴史、地
理問題に於ては、「三江九江説に就いて」(岡崎文夫、支那學)
は禹貢を理解する胡渭説、漢志水經による考證的方法阮
元説、三江を江蘇安徽に求むる晋人説、禹貢の本文を二
分して解する揚守敬説に批判を加へ、三江地方は浙東浙
西地方、九江地方は洞庭地方ならむかこ謂ひ、「元代の地
名開元の沿革」(池内宏、東洋學報)を考ふるに、開原なる
地名は古く滿洲處々に存するが、開島地方に此の名を與
へたものは蒲鮮萬奴、農安縣地方に與へたのは蒙古の太
宗七年、三姓附近に與へたのは太宗の十三年であつて、
之が元代開原路の起源である。「完顏氏の曷懶句經略」尹
壻の九城の役附蒲盧毛朶部に就いて「同人、滿鮮地理歷

史研究報告第九)も金の穆宗が勢力範圍に入れた曷懶句
を咸興平野に擬して、彼と高麗との關係、豆滿江地方討
平問題に及び、「明代以前の支那人に知られたるフイリッ
ピン諸島」(和田清、東洋學報)は、島夷志略の毘舍野が
Miana 島、文獻通考の摩逸が Mait 島ならむことを論じ
「南京の建都」(岡崎文夫、支那學)は南方支那開發の所以
を實地踏査上より論じ、「廣東雜記」(橘仁太郎、同誌)は
日月井、白雲山、荔枝灣、南越王宮址、譚村の見聞に及
んで居る。權威ある紹介としてはミユゼーギメ新刊考
古時報第十一冊及び第十二冊(石田幹之助、東洋學報
「アルスアジアテイカ第三卷」(同人、同誌) Louis 博士の
支那數學論(三上義夫、同誌)、「バウル・ペリオ敦煌千佛
洞圖錄第四輯」(白鳥庫吉、同誌)歐米に於ける支那學の
近狀(岩松五良、史學雜誌)、「フアイスト氏トカラ人問題
の現狀」(石濱純太郎、支那學)、「ペリオ氏吐谷渾蘇昆考」
(同人、同誌)「西夏學小記續」(同人、同誌)「中期波斯文
獻及び諸王の書に窺はるゝ古代印度の事」(亞細亞に於け
る基督教の傳播)(高橋邦枝、東洋學報)「ルコツク高昌

古址踏見トルコ文摩尼教遺文考第二冊(東洋學報)があり。紀行に「杭州から」「江南春」(青木正兒、支那學)、「鄭玄の故址を訪ねて」(晏子の故里ミ其墳墓(田中逸平、斯文))、「山西省大同府雲崗石窟の解説」(小村俊夫、東亞經濟研究)、「臺灣紀行」(江崎梯三、東洋學藝雜誌)、「北京の觀象臺」(洞天勝地白雲觀)、「天寧寺西大寺法源寺壓訪」(北京正陽門外中和茶園「津浦鐵路にて北京より南京へ」(以上五篇那波利貞、歴史ミ地理)がある。「那波」)

西洋史 先づ著書としては一般史の方面では「西洋歴史講話」(村川堅固、藤本慶祐共著、早稻田大學出版部)「國民西洋歴史」(柴田親雄、富山房)の兩著が公にされて居る。前者はワシントン會議に至る最新の記述を含み、且政治外交のみに偏せず、文化の諸相にも説き及ぼせる點に於いて好箇の參考書であり、後者は趣味豊かなる青年の讀物たるを目的とせるこゝに於いて略成功に庶幾きものであらう。「ウエルス世界文化史大系」(新明、佐野、波多野、北川諸氏共譯大鑑閣)のやうな一般讀書界に宣傳されて居る世界的名著が完全に邦譯されたことも特筆せ

なければならぬ。最近世史に關する圖書は例によつて數多い。「最近世界史の大觀」(時野谷常三郎、目黒書店婦人文化叢書第二編)は世界大戰迄約五十年間に於ける世界の大勢を概論したもので、歐洲列強の内治外交から最近世界政策の發展衝突に及べる簡明な記述は頗る要を得たものと思はれる。「西洋最近世史」(煙山專太郎、早稻田大學出版部)はヴィンナ會議から世界大戰の終了に至る諸國家の内外政策諸民族の隆替社會生活の變遷推移を説けるもので既刊の歐洲最近外交史ミ共に著者得意の述作である。「最近露西亞史講話」(齋藤清太郎、明治書院)は大戦以前の露國最近世史を取扱つたもので一九〇五年の政治革命の由來經過、其後の憲政、領内諸民族や露領アジアの問題を論述したもので、この方面に於ける著者の造詣を示せるものである。「現代歐洲政治及社會史」(ジ・エス・シャビロ著渡邊幾治郎譯、早稻田大學出版部)も、我が讀書界に歐洲最近世史の廣汎なる知識を供する稀有の好譯書として推奨するに足るものであらう。近世史の部門に屬するものとしては故筑作博士の遺稿たる「第十八

世紀佛蘭西文化史・社會主義運動史（富山房發行）が最も異彩を放つて居る。本書は博士の東京大學に於ける講義を修整したものであるが、「第十八世紀佛蘭西文化史」はその得意とせられた革命前一世紀間に於ける佛社會狀態の觀察が、いかにも細微な點に向けられて居るのは、他の容易に追隨を許さざる所であり、これと合冊になつ居る「社會主義運動史」は寧ろ社會主義的思想及び其運動の源流を説いたもので、論述の範圍は古代中世の時代を主としたものではあるが、隨所に博士一流の史論を披瀝されたものである。この他、外交史の方面では、「一八五三—一九二一年日米外交史」（村川堅固譯補、寶文館）がトリート博士の原著を忠實に譯出して、比較的穩健公正なる日本關係の史論を邦人に紹介した譯述者の勞を多とすべきであらう。

雜誌論文として注目すべきものは、一般史に屬するものでは「基督教文明の發展概論」（財部靜治、經濟論叢）が、George R. Davis, National Evolution. 中に見えて居る基督教文明史論に基き、西洋文明の精神的基礎を歴史的に通

觀した、前後數回に互る長篇として一般の注意を惹くものである。最近世史の方面では「世界大戰責任論」（原勝

郎、史林）がある、獨露、英獨、佛獨間に於ける戰爭責任論の種々な方面を挙げ、該問題に對する獨逸側及聯合國側の利害態度主張の機微を穿つた論評である。「北シラスウヰヒに行へる獨逸の同化政策」（時野谷常三郎、歴史と地理）「第十九世紀愛蘭土地法制小史」（小島機一、同誌）日英同盟史論（匹田直、同誌）は、孰れも近來世人の興味を惹き來れる問題を取扱つたもので、共に有益なる記述たるを失はぬ。中世史に關したものは「エドワード第一世」（占部百太郎、史學）が優れた立法家として將た又模範國會の創定者として、エドワード第一世の英國文化史上に於ける位置を論じて居る。古代史の範圍では「アテネのデモクラシーの理想と現實」（安藤俊雄、歴史と地理）が、ペリクレスの理想とした所と現實のアテネ民主政治とが那邊迄一致したかを觀察して居るの、「新約時代に於ける猶太人の社會生活」（鈴木錠之助、史學）がヨゼフスや新約聖書其他に據りて當時の經濟生活社會組

織家族生活藝術の各方面を叙説したのミを挙げねばならない。法制史の部門では「回教法制の源流」(飯田忠純、史學)が、回教法制の直接及間接の淵源回教法學の諸流派、回教法に於ける外法繼受の概觀の諸條項に互り嚴密に研究論述した勞作であり、「羅馬法分布史に於ける東羅馬帝國の地位」(栗生武夫、法學論叢)が東羅馬帝國が中世に於ける羅馬法の保護者たるミ共に、キリスト教徒の倫理觀念を法律化し寺院法ミ羅馬法ミを接近せしめた點に於いて、又其の改善者たりし所以を説いたもので、共に注目すべき論文である。(植村)

考古學 昨一年の斯界の業績を概觀するに當つて先づ總括的な「通論考古學」(濱田耕作、單行)の出で、組織立つた考古學の目的や其の取扱ふ資料及び特殊の研究方法を示して學的基础を明にした事を舉ぐべきであらう。そして各時代に關する特殊の研究は前年に引續いて石器時代に屬するものがやはり盛んではあつたが、これから金屬器に移る過渡の時期の遺物が寧ろより注意を惹くの傾向を表はし、古墳墓に關する眞面目な調査研究また漸

く多きを加ふるに至つたのは喜ぶべき現象である。石器時代に關する遺跡の學術調査報告の類では「琉球伊波貝塚發掘報告」(大山柏)が大正九年四月發掘の結果を詳記して、其の出土の土器に就いて特に新しい研究の方法を示してゐるのをはじめ、「鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡」(梅原末治、鳥取縣報告書)は因伯二國の遺跡の綜括的記述を試み、遺物中著しい彌生式土器、挾入石斧、石劍、石庖丁、玦狀耳飾、子持勾玉等に就いて考察して同地方の遺跡が南鮮のそれミ密接な關係があることや、また年代觀に一の推定説を發表したもの及び伊勢志摩等の同代遺物遺跡の概括ミ、伊勢桑名町附近の二三の貝塚の狀態を載せた「三重縣下に於ける彌生式土器發見遺跡」(鈴木敏雄、三重縣報告書)の著しいものがある。短編では北から數へて「北海道北見國禮文島の石器時代の遺跡」(八幡一郎、人類學雜誌)後志瀨棚郡の遺跡に就いて記した「利別川河口附近の堅穴」(松橋祐藏、國學院雜誌)「羽後國男鹿半島角間崎貝塚研究報告」(武藤一郎、人類學雜誌)武藏の下末吉ミ高田の兩貝塚を録した「橘樹、都筑兩郡の石

器時代遺跡遺物〔谷川磐雄、武相研究〕「伊豆海島の石器時代遺跡に就て」〔小松眞一、人類學雜誌〕「信濃國諏訪郡金澤村堅穴」同豊平村廣見發見の土偶〔以上八幡一郎、同誌〕「氷見郡大境洞窟住居址」〔大村正之、富山縣報告書〕等があり、西の方では「備中發見の石器時代土偶」〔鳥居龍藏、人類學雜誌〕「阿波國貝塚概説」〔笠井新也、阿波名勝〕「南隅に於ける二三の先史時代遺跡」〔鳥田貞彦、考古學雜誌〕などを舉ぐるこゝが出来ゐる。「考古漫録」〔清野謙次、民族と歴史〕は一部分に古墳關係の事項を含まれては居るが、また大部分この時代の遺跡遺物に關する著者の獲た資料を載せたもので、西は九州から東は三河邊に亙り、貝塚の狀態や、其の人骨の發見等が錄されてゐる。同時代遺跡發見人骨は昨年は三河に於いて特に著しいものがあつて清野博士の如きは吉胡矢崎の貝塚で無慮二百數十體を蒐集し、小金井博士また保美等の貝塚で三十餘體の遺骨を獲られ、鳥居博士の阿波城山洞窟の發見なども數ふべきであるが、關係事項の研究發表としては、自家の古人骨に關する研究の立脚

點を明にした「種族特殊性ト東西古人種ノ研究」ミ、「化石病理學特ニ日本原住民ノ骨疾病ニ就テ」〔以上清野謙次日本微生物學會雜誌〕ミの二編及び拔齒に就ての *Über die künstliche Deformation des Gebisses bei den steinzeitmenschen Japans* (小金井良精、東京大學醫學部紀要)「二三石器時代古式遺跡に於ける拔齒風習に就て」〔松本彦七郎人類學雜誌〕を主なる論文とする。此の拔齒に關する論著の前者は前年人類學雜誌に發表したものに更に補訂を加へたもので、アイヌの遺した貝塚の人骨や河内國府、越中氷見の洞窟に於いての調査の結果を詳述して、他地方にも及ばれた綜合的研究であるし、後者また大正九年以降獲た陸前青島、同川下り、同細浦の三介塚人骨に表はれた處を報じて、從來の拔齒に關する知見を纏めたもの、これ等に依つて同代拔齒の風習の變遷が頗る明瞭を加へたことは特筆すべきである。次に石器代から金屬器に移る過渡に表はれた遺物である銅鐸、銅劍、銅鐙等の一類に就ては前年銅鐸に注意すべき研究があつたのに對して昨年は主として銅鐙、銅劍が取扱はれて顯著な業績を示し

たことは特記に値する。即ち資料としては「明治三十二年に於ける須玖岡本發掘物の出土狀態」(中山平次郎、考古學雜誌)が最も重要な其の發見の顛末を明確にして研究に基準を與ふるものであるし、「須玖新發見の廣鋒銅鉾」

(同人、同誌)や「料馬國上縣郡佐須奈村發掘品」(後藤守一、同誌)等の報告を擧ぐるこゝが出来る。特に後者は前年銅器土器銅鉾類の發見せられた興味ある遺跡であるに就いて、後藤氏が後親しく其の地を訪ふて調査を重ね其の結果を載せた「對馬瞥見錄」(同人、同誌)は此の種遺物を中心として上は石器から、石劍、古墳、山城等にまで記述を及ぼし、從來明瞭でなかつた對馬の遺蹟を紹介した有益な文字である。「南朝鮮發見の銅鉾銅劍」(梅原末治、人類學雜誌)は同じ遺物の南朝鮮での發見を録して、其の研究上の價值を論じてゐる。是等の資料編に對して「銅鉾銅劍考」(高橋健自、考古學雜誌)は其の綜合的研究であつて數年前の稿を嗣ぎ、主として考古學上の見地から其の様式の變遷と遺跡に墳墓・信仰上の意味を有する二者のあるこゝを指摘して、伴出の遺物—特に鏡の研究から

其の年代が支那の前漢に相當るべきを説いた力作で、未だ完結せないが、昨年度に於ける最も見るべき論文の一と云ふべく、中に含まれた其の支那古式鏡鑑の形式論の如きも創見を示したものである。なほこの過渡期を取扱つたものでは「勾玉管玉考」(中山平次郎、歴史と地理)が上記須玖遺跡の出土品から推して本來西曆一世紀にはなほ我が國には骨製の玉が行はれたてゐるが、同代玻璃の傳來から美玉を求むる様になつて硬玉、碧玉品を見るに至つたこの假説を提供したものがあつた。「磨製石鏃に就て」(大野雲外、同誌)が九州、中國、本州中部等に往々見る同石鏃をその形や製作の上から銅鏃等を模したものであるいかゞ説いてゐる。また當代に表はれたとせらるゝ墳墓の一形式として「信濃國諏訪郡本郷村のドルメン類形の遺跡に就いて」(八幡一郎、人類學雜誌)「信州南安曇郡有明村、ドルメン類形の古墳に就て」(宮坂光次、同誌)の三報告を見たし、石劍には上述鳥取縣報告書に於ける集成研究の外、丹波の「西中筋村石劍發見ノ遺跡」(梅原末治、京都府史蹟調査報告書)の遺品の調査報告がある。古墳墓

關係の事項では「古墳」上代文化（高橋健自）は從來の斯界の業績に本いて我が古墳墓の構造部分をしてゐる封土、石室、棺槨等の種類形式を綜括記述したもので一種の古墳構造論とも云ふべく、「横穴に就て」（小松眞一、人類學雜誌）は横穴に新舊の二式あることを注意して、我が四隣の國土の横穴の構造の對比の上から其の由來年代等を究めんとしたもの。また肥後「玉名郡江田村船山古墳調査報告」（梅原末治、熊本縣報告書）は最も豊富な副葬品を出した同古墳の構造と其の一々の性質の記載を試み考古學上から遺跡の年代を論證して併せてその我が墓制上に占むる位置を考査してゐる。各地の古墳に就いての調査報告は畿内では京都府史蹟調査報告書に、委員の學術的調査を行つた「山城乙訓郡妙見山古墳」の調査をはじめ「大住村車塚古墳」「棚倉村平尾ノ古墳」の古式墳墓と横穴式石室を主體とする前方後内墳である「太秦村天塚」の記述があり、大和には「大和國外山村發掘の家型埴輪に就いて」（小泉顯夫、民族と歴史）「大和に於ける家型埴輪出土の二遺跡について」（森本六爾、考古學雜誌）の二編が

共に此の珍らしい遺品と出土の遺跡を紹介した物「御所町附近の遺蹟」（梅原末治、歴史地理）「磯城郡島根山古墳に就いて」（同人、歴史と地理）は「攝津武庫郡に於ける二三の古式墳墓」（同人、考古學雜誌）や「近江和邇村の古墳墓特に大塚山古墳に就いて」（同人、人類學雜誌）と同じく主として出土の古鏡、其他の遺物を中心として本邦墓制沿革上の興味ある遺跡を詳記した類である。東國の方面では「遠江國大塚古墳調査報告」（後藤守一、考古學雜誌）が大形の神鏡を發見した塚の構造を録し、「同國榛原郡初倉村高根森古墳」（同人、同誌）又鏡等の出た同古墳が石棺のある横穴式室あるとを明にした物、駿河駿東郡揚原村の古墳から出た珍らしい遺物を紹介した「丁字形利器發見古墳」（鈴木嘉昭、後藤守一、同誌）武藏の業平塚に就て」（鳥居龍藏、武藏野）は古地誌の記載に本いて其構造形式の復原を試みてゐる。而して「下總國に於ける或三四の石室古墳」（小松眞一、人類學雜誌）は從來餘り精細な報告のない同地の横穴式石室を實測圖添へて紹介した物で、「武藏國南部の横穴群に就いて」（同人、同誌）と共に關東方面

での最も見るべき報告云ふべきであらう。「東北地方に於ける奈良朝時代の一墳墓（後藤守一、考古學雜誌）」は羽後川邊郡小阿地の唐鏡、厥手刀、飾太刀等を發見した遺蹟の遺物を特記してゐる。北陸の方面では「能登發見の家型石棺」（上田三平、民族と歴史）「加賀能登の古代遺跡」（同人、考古學雜誌）「加賀國法皇山の横穴」（同人、歴史地理）の三編を擧ぐるこゝが出来る。就中法皇山の横穴は昨年度の發見で、最も複雑精巧な横穴に屬し、これには別に「法皇山の横穴」（同人）の小冊子が出た。中國四國の方面では「周防三田尻附近の石室古墳（梅原末治、考古學雜誌）」「同國都濃郡下松町宮洲發見の古鏡」（同人、歴史地理）「阿波國美馬郡段の塚穴」（笠井新也、人類學雜誌）なきが其の主なるものであらう。朝鮮方面では「慶尙北道及南道古墳調査報告」（濱田耕作、梅原末治、總督府報告書）は大正七年の發掘調査に係る八個の古墳の精密なる記載を主として、其等の事實から年代を考へ、これを内地の古墳の示す處と對比して上代日鮮の墓制關係を考察した長編であるし、原田委員の同じ題目の報告には慶州

普門里の新羅時代の積石塚に關する發掘報告が録されてある。古墳ではないが「遼東の冢」（關野貞、建築雜誌）には樂浪郡治の遺址として大同江面土城發見の由來、其の附近から出土した瓦當、封泥、磚、銅器等を擧げて、同遺跡が前漢代から存した事を説いた一編と、特殊の立石の報告である「朝鮮全羅南道順天立石里に於けるメンヒルに就て」（鳥居龍藏、人類學雜誌）とはまた朝鮮關係の論著の著しい、ものとして附記すべきである。

以上の如き考古學上の研究資料の増加に伴つて、これに立脚して上代の文化が宗教思想に關する考察が數年來餘程多くなつたが昨年度では特にそれが目立つて來た。前者の中で「東亞文明の始源」（濱田耕作、大阪朝日新年文集）は支那文化の由來と其の朝鮮日本の文化に對する影響を總論したもので、「日本文化とは何ぞや」（内藤虎次郎同上）と併せ見るべく、「考古學上より觀たる邪馬臺國」（高橋健自、考古學雜誌）は銅鐸や鏡の分布から推し、また我が前方後圓墳の起源が大和にあつて早く金石併用時代に存したこゝから、畿内の文化の古いこゝを力説して

それは支那の影響は受けてはゐるか、自らまた獨特の文化を示してゐる點は邪馬臺の大和であるのを物語るのので有る論じた。「上代の南朝鮮に」(梅原末治、思想)就いては同時方から近時發見せられた遺物に依つて、石器時代から金屬期への過渡の年代と其の文化推移の支那のそれに多いとを指摘し、「上代近畿の文化發達に就いて」(同人、同誌)は同じ考古學の見地から、我が大和朝廷が畿内で石器時代の狀態から支那文化の影響を受けて同一民衆の成し上げたものであることを其の文化推移の狀態の上から論じた姉妹編である。また「工藝品から見た支那文化と日本文化の關係」(後藤守一、東洋)は工藝品中、特に我が鏡を採つて、我が國の鑄造と認めらるる遺品に現はるる特色から、我が文化が單なる支那のその模倣のみでなかつたことを説いてゐる。宗教關係の分野では「古代日本住民の惡魔思想に就いて」(榊原政職、民族と歴史)は石器時代以來の墳墓に現はれた事實から同思想の變遷を推究したもの、「石器時代宗教思想の一端」(谷川磐雄、考古學雜誌)は同じ方面の研究の一で主として土偶土版其他

の動物を表はした遺品から Totemism の痕跡を辿らんとした試みである。「日本石器時代民衆の女神信仰」(鳥居龍藏、人類學雜誌、宗教研究)は土偶と土版とに現はれた形から女神信仰のあつたことを想定して、遺品の分布から其の信仰存在の範圍を推し、更に歐洲新石器時代やアナウの女神と對照、其の間の關係に及び女神信仰の由來を説いた興味ある一説である。古墳以外の遺跡では「山城式列石の疑點に就て」(橋本増吉、史學)が所謂神籠石遺跡に關する從來の調査の不備から、其の研究の誤つた點を指摘して、列石は蓋し木柵の臺石であつたらうと云ひ、神籠石靈域説を疑ひ、其の年代に就いては卑彌呼との關係を規定したものが、「神護石」三田評論、松本信廣)また同じ問題を取扱つてゐる「遼東の冢」(前出)には法隆寺堂塔の否燹失を廻廊の基部の發掘の結果からの論證や、播磨石寶殿の形狀の記述及び鎌倉再興の東大寺大佛殿の瓦が備前の赤磐郡太田村大字萬富の窯で作られたことを遺物の上から立證した文がある。この瓦窯の事は京都府の報告書載する「修學院村平安宮所用瓦窯址」の

明にせられたる並稱すべきものであらう。遺物の研究では古傳說と土俗から古代の筏を考察した A Study of The Ancient Ships of Japan. Part III (西村真次)は「青森縣東津輕郡荒川村發見の丸木舟」(石田收藏、人類學雜誌)と共に船舶に關した業績であるし、和鏡には各時代の特徴を綜括的に記述した「和鏡に就て」(廣瀬治兵、考古學雜誌)と一々の遺品の形式を擧げた「紀年鏡に就いて」(同人、同誌)の二編があり、また古瓦に就いては前年から續いた京畿地方に於ける古瓦文様の研究」(伊藤清造、同誌)を擧ぐべきである。「法隆寺金堂四天王木像の作者に就て」(岩橋小彌太、國華)は從來山口大口費及び樂師德保等二組の彫刻家の別々の作とせられてゐる此の四天王の像を様式の上から全然同一の作者の手になつたを見て、光背にある銘文に新解釋を與へ彼等は此の像の奉納者で、作者は古き麻良みの二人としたもの、遺物に立脚して從來の單なる銘文の取扱ひを排した處に注目惹く點がある朝鮮の方面では特に陶器の類に關する稍纏つた論著があ

つた。其一は「朝鮮の陶磁器に就て」(奥田誠一、國華)で上古からの韓半島に於ての陶器の發達を綜括して、特に最も精品を産した高麗時代の青磁白磁に就いて専門上の研究が加へられてゐる。これに對して「本朝陶器の價值及び變遷に就て」(淺川伯敦、白樺)「李朝陶磁器の特質」(柳宗悅、同誌)は普通に墮落見るべきものがないと云はれてゐる同代の陶磁器がなほ頗る優れた作品を持つてゐることを實物の上から證して、其の特質に及んだものである。特殊の遺物に關したものとしましてはなほ野山に於いての建立と其の發達の痕を觀た「高野山卒都婆碑の變遷に就いて」(水原堯榮、民族と歴史)や、「奈良の頭塔と大谷の石佛」(小野玄妙、佛教學雜誌)、信濃國發見の板碑を綜括した「小縣の板碑」(小山真夫、武藏野)等を數へることが出来る。

以上の内地概觀について支那の方面を見るに、美術考古學の分野に關する論著の多いのが目に着く。就中「大同の石窟寺」(木下奎太郎、木村莊八)は種々の方面か

らこの有名な石窟寺の美術を観察してあつて中川忠順氏等の編した同寺石佛の寫真集と並び見るべきものであるし、「天龍山石窟調査報告」田中俊逸、佛教學雜誌）は數年前關野博士發見の同遺跡に對して更に大規模に精密な調査を行つた結果を載せたもの、同時に將來の寫真は「支那佛教藝術寫真集」の第一として公刊せられた。「天龍山石窟造像攷」（小野玄妙、同誌）は主として文獻の方面から此の石窟佛の性質年代を論じてゐる。「支那佛教史蹟踏査報告」（常盤大定）また其の中に此の方面の遺物を載せてある。美術以外で擧ぐべきものは「スキート族三翼式鏃に就て」（以上烏居龍藏、人類學雜誌）の語編が各の特色のある遺物を觀察して、トルコ民族を通じてのギリシアの文化や或はスキタイの文明が極東に及ぼした影響の少くないことを説いた出色の文字があつたし、「細金細工に就いて」（濱田耕作、史林）は朝鮮や日本の古墳から見出される此の細金細工の遺品を以て、ギリシヤやエトルスキ、スキタイ族に於ける類似品と比較して、其の手法の系統を

辿つた處、また前者と同じ見地に立つた研究である。「古代支那の鐵器に就いて」（松本文三郎、史林）は主として文獻上から論じたもので、其の起源の古く周代にあること、初は農具家什の類が作られたものであることを秦漢塩鐵專賣の事實から推究し、而もまた武器もあつたことを説いて其の種類に及んだもの、「遂と鑿」（同人、藝文）は同じく支那の古文獻を精査して、上代の所謂遂なるものに木遂、金遂、陽遂の三種の別があつて、木遂最も古く、金遂は青銅文化の所産、陽遂は漢代海外交通の結果遠く西方から入つた所謂硝子のレンズであるべきことを説いた新説、續鑑鏡考（同人、同誌）は前者に關聯して、上代の鑑鏡の思想に鏡の意義なき鑑即ち大盆、明水を見るに取る鑑及び眞の鏡の鑑と三段の發展のあることを推し三者並び存したが、この最後のものゝ發生と共に鏡なる文字が作られた。従つて鏡と鑑とは本來その間に區別があつたが、後漢の建安の頃から混同して用ひらるゝ様になつたと説き、遡つて支那の鏡の起源を紀元前四世紀の中葉にあるべきを莊子や韓非子から論證した。鏡の遺品

に就いては「獸首鏡に就いて」(梅原末治、史林)の新出の二個の年號鏡に本づいて其の永續の年代を論じた一編がある。「唐宋陵墓の研究」(關野貞、東洋)は實地調査に基き、西安府の附近九峻山にある唐太宗の昭陵と梁山にある高宗の乾陵等を詳述して唐代の陵墓の式を考へ、北宋の太祖の永昌陵と太宗の永熙陵など南宋の諸陵を略記して宋の陵制を見たもので、古く同じ著者の發表した「周漢の陵墓」を併せて、支那の陵墓の外形の變遷を察し得るに庶幾い。

支那以外の地方では先づ印度に「アジャンター石窟寺の彫刻的文様に就て」(澤村專太郎、國華)の美術史的研究があつたし、ジャバのボロボドルの彫刻を論じた「閼婆の千佛壇」(大村西崖、佛教學雜誌)また擧ぐべく「埃及學の創立」(間崎萬里、史學)は其の學の基礎を置いたシヤンポリオンが埃及繪文字解讀に成功してから百年に當る記念として、其の沿革を擧げたもの、同じ類にはシュリーマンの生誕百年を祝して其の考古學上の業績を回顧した「シュリーマン博士の追憶」(濱田耕作、表現)もある

「クニドスのデメテル」(澤木四方吉、三田文學)は一八五七年にニウトンの發見した希臘彫刻に稀な表情の深密さを持つ此の像の價值を論じて其の年代や作者に及んだもの、「古拙を愛するの心より」(高橋邦枝、史學雜誌)にはウアーレ氏の新石器時代のドイッや、サ、ン朝時代の絹織物に就いてのヘルフェルド及びラルゼン兩氏の新研究が共に忠實に紹介せられ、またイタリアに於ける考古學的發掘研究の復興等が記されてゐる。新大陸に關しては「北太平洋の文化に就て」(榊原政職、民族史)の一編史前北アメリカミ支那及び日本の遺物との間に甚だ類似の大なるものあるを指摘して、これは皆て兩者を包括する北太平洋中心の文化のあつた結果であらうと見た興味ある假説である。「南米美術裝飾圖集」(濱田耕作序説、島田貞彦編)の印行また此の方面の一收獲で、その序説にアメリカ新大陸の遺物に關する概括した記述がある。最後に考古學と特殊の關係ある補助學科に就いて其の業績の一二を瞥見するに、人類學では實地調査の結果を報告した「北樺太及黑龍江下流の民族に就て」や文獻上から

民族の研究に資した「文献史上より溯り觀たる南滿洲最古の住民」同東蒙古最古の住民（以上鳥居龍藏、人類學雜誌）があるし、「黑龍江ウルミ及ソングースカ居住ゴリド族に就いて」（同人、同誌）のリブスキ氏の説の紹介あつて滿洲西伯利亞の方面が注意に上つたのを特筆すべく、土俗傳説等の分野では先づ「郷土誌論」（柳田國男）の一編が郷土誌編纂に關する新しい組立を論じ、村の年齢を知ること、村の成長と其の種類、農に關する土俗等に就いて明快な觀察を加へたのを特記すべきであるし、「祭禮と世間」（同人）は土俗學上の見地に立つて理學者の祭禮觀の皮相當らないのを指摘したもの、信濃北安曇郡の資料を收めた「小谷口碑集」（小池直太郎）岩手縣の「江刺郡の昔話」（佐々木喜善）琉球の口碑を集めた「南島說話」（佐喜眞興英、以上爐邊叢書）「八重山諸島物語」（宮良當壯、人類學雜誌）「琉球八重山諸島の民謠」（同人、國學院雜誌）等有益な資料の公刊と、「大和年中行事一覽」（高田十郎、奈良）の綿密な記錄の作られたことも數ふべきであらう。

「チャム民族の土俗に就いて」（坪井九馬三、人類學雜誌）

は各方面に互つて其の習俗を紹介した一雄篇である。風俗史關係の事項は其の専門雜誌「風俗研究」等に數多く見ゆるが、「束帶の起源」（高橋健自、中央史壇）は遺物の上に立脚して論證したものとしまして特筆すべく、また「羽織の起源とその襟に潛む疑問」（伊藤尠、考古學雜誌）がある。金石文關係の資料は可なり數多く紹介せられたが、就中「日本金石文拾遺」（佛教史學會、佛教研究）は最も多くこれを收録したものである。研究考證では朝鮮慶尙南道昌寧の古碑の銘文を解釋した「新羅眞興王巡狩管境碑考」（今西龍、考古學雜誌）の注目すべき一編があるし、支那では「化度寺塔銘に就いて」（再び化度寺塔銘に就いて「漢婁壽碑考」（以上神田喜一郎、支那學）の諸編が今ま原石の亡佚してゐる是等の銘文を舊拓本に依つて異同を訂し、從來の諸家の考證を綜括したもの、及び「三階教に關する隋唐の古碑」（同人、佛教研究）の特殊な研究を擧ぐべきである。（梅原）

● 地 理 學 界

概観、昨年の地理學界に於て佛國の Martonne 氏が *Principes d'Geographie Humaine* を出版した事は特筆すべき

事實である。最近の地理學界では兩極方面の探險事業は殆んど一段落を告げ、今度は大陸内部を部分的に精細に研究報告する事が要求されてゐるに共に、自然地理學の方面は、地球物理、地質、地史、岩石、氣象など、それぞれ専門的部分的研究が盛んになつてきてゐる今日、人文地理學のみが Martonne 以後に著しき進歩もなく分化もなく停頓してゐるかの感がある際 Martonne 氏の如き大家が Martonne の學風からは全く離れ佛國の Brunet の跡をうけて、新たな人文地理の見方を提示した事は誠に意義の深い事である。今この書の目次を見ると、第一篇に「地上に於ける人類の分布で、人口分布の密度や其不平等の狀況や移住運動を取り扱ひて其の總論とし、亞非利加、亞細亞、及歐洲に於ける人類の集團を細説して其結果に及び、第二篇は、文明の様式といふ題目をかゝけて、人類集團と環境との關係、複雑なる人種の成立を論じ、器具、物質及營養の手段を論じて、地中海形式、亞米

利加形式、中歐形式、北歐形式、支那式、日本式等 Civilization の形式を詳説して其の繁榮する所以を論じ、家屋建築の材料の題下には、乾燥地方、地中海岸地方、中歐及東方諸國、日本等、各家屋樣式の異なる所以を述べ、人類の建造物を概論して文明の進歩との關係に及び、第三篇、交通の章には、交通の手段、動物、車、道路を論じて、近世の道、鐵道及航路について説明してある。猶篇後には、人種の形成、發明の弘布、文明の範圍と其生命、都市等の小論文がある。以上の目次によりて大體 Martonne 氏の考が窺はれやう。この書に對立するものに獨乙から Armand 氏の *l'histoire Geographique* の著述がある。氏の序文によるに書肆が Martonne の政治地理書を改訂増補して欲しいと頼んだけれども氏はラツツエルは意見が違ふからといふので、全くラツツエルを離れてこゝにも新にこの書を編纂したのだとの事である。氏の意見に従へば政治地理の要素となるべきものは、地形、土壤、水界、氣界もしくは、内外地誌のすべてである。何となれば政治地理の題目たるべき、國境論、軍事

地理、交通地理、經濟地理、國家、航空、貿易等、何れも自然地理を基礎として、後初めて解決し得らるべきであるからである。従つて本書は、左の如き内容を有してゐる。一、經濟地理、植物、動物、礦物、水界、氣候及農業と人口との關係。二、交通地理、地形、河川、海洋航空、交通機關と人口との關係。三、政治地理(狹義)身體及精神上より見たる民族論、國際地理(貿易經濟の影響、交通の影響、國力及政治の影響)國境論(自然的、軍事的、及民族的國境、經濟的の國境)國內政治地理(民族及行政區劃)ミ。これを前のマルトンヌの人文地理の目次と相對して、人文地理學に關する兩國學風の差を認めぬわけには行かぬ。卽ち後者は自然地理の考が多く、前者は歴史的發達の考が深い。獨乙流にするミ分類は極めて正確明瞭であるか、一方マルトンヌの取扱ふやうな總括的の妙味に乏しい感がある。何はともあれ昨年の地理學界に於て、人文地理學の方面に、かゝる新しい著書を得たことを祝せなくてはなるまい。それから西洋の雜誌を見るに *Geographical Journal* には昨年來のエヴェ

スト探險の報告をはじめ、バンダヤブ、西雲南、チグリス、アビシニア、ピボールシエラレオネ、カメルーン等、英國の勢力範圍に屬するアジア、アフリカ地方の報告が、重要な部分をしめて、學術上の論文發表は少く、*The Scottish geographical magazine* にも中央亞細亞、東阿非利加、ニヤッサランド、の地文、アルゼエリアのバーバル民族等に關する報告が多い。佛國の *Annales de Géographie* には佛國の人口、英國の問題、ニジェル川の灌漑ミ棉花極東及太平洋、軍事地理ミ政治地理、なぞいづれも努力の多い論文に満ちてゐていかにも今この國に人文地理の方面の研究が盛んである事を知らしむるに共に、紙面に活氣が充ちてゐることに敬服するが、一方獨乙の *Mitteilungen* は戰前の活氣を失つて、頁數も少く、論文の數も減じ、且短くなつてゐるのに對し、感慨からざるものがある。その中で九月號に Otto Hrad 氏の支那十八省の面積の新しい計算がつてゐる。これは讀者にも興味があらうと思ふからこれを左にかゝる。

年代 計算者 十八省全面積

一八七三 Engelhardt 三九八五八八七平方杆

一八九一 Troguliz 三九八九三五〇

一八八八 Strelbitky 三九五三三九七

一八九一 Wagner 三九七〇一〇〇

一九一九 Israel 四〇四四八〇〇

完全なる支那の測量が出来上る迄は、まづ四百萬平方杆といふ數字を以て支那十八省の廣さを見てよろしい。支那に關しては、米國の地理學者の研究は中々進んだものであつて Geographical review の正月號には、Clapp 氏の黃河論。Whiting 氏の支那文明の發展に對する地理學的要因などは可なり念入りの議論もあるが、同誌にはこの外にノグゼムブリアの氷河、人口問題、フワンデー灣の潮汐、キューバの農業、エスキモの美術、白人植民分布の將來。市の地理、防備なき國境、地殻及アイソスタシー等、自然人文のあらゆる方面に互つた論文が多く、送迎に違がない程の勢である。

轉じて我國の地理學界を見るにや、寂寞の感がないでは

ない、併し各方面に熱心なる研究發表の少からざるものがあるから、收獲必しも少かつた年とは云へない、最初に著書について、記者の見た限りについてのべる。

先づ著書としては人文地理の方面に於て「日本の民家に（今和次郎）がある事を忘れてはならぬ。二百三十八頁の小冊子ではあるが、田舎の家屋の構造間取について詳論し、其挿圖は特に著者獨得の手腕を示めせるもので「繪ミ説明」ミ題する百頁餘の部分は、我國内にて四十一ヶ所の特別な農村漁家等を描き出したもので、極めて巧者に顯はされ、一目して特色ある農家の様式が明に感ぜられる。誠に人文地理の研究者にとつて、ここに居住地理を專攻するものには、得難き好伴侶である。著述ではないがこれと類似の研究が奈良市高田十郎氏の手によつて行はれ氏が汽車の窓から見た我國各地の民家の屋根をスケッチしてこれを「なら」第十一號に掲載した事を附記したい。凡そかかる材料は地方の郷土史家の供給すべき好適のものと思ふが故に敢てかかる趣味が一般化せん事を望むものである。次に經濟地理の方面では「日

本の海運(伊東次郎)がある、四六版三百頁内外の小冊子であるけれども日本海運の沿革を略叙し、特に戦後の海運界を詳説し、將來に關する希望が述べてある。それから最後に、ロンドンで出版されたものではあるが、*Evolution of Japan (Geot)* を附記したい。背皮に「日本の眞髓」を金文字の入った、菊版五百頁の本である。其取扱つた要點は、日本の農夫、男女勞働者の狀態をのべ、米作と蠶業とに注意して、精細な説明を與へたものである。最近五十年間、我國に止まつて、各地を遍歴した結果の中には好奇的なつまらない部分もあるけれども、是迄の外人が試みなかつ點を叙述してあるから多少我々の參考になるものと信ずる。猶著述の中に「お寺まわり」「鐵道省」がある。近畿の寺院について、沿革建築物美術品等を解説した美本である。これは大正八年に同院から出版した「神まうで」「温泉めぐり」の姉妹篇であるが、その何れよりも、遙かに出來榮がよい。

轉じて、昨年中の雜誌報告類を見ると、自然地理の方面は昨年は誠に賑はしい年であつた、中にも東北帝國大學

理學部の研究報告の中に「日本洪積世氣候論」(矢野長克)がある。これは明治四十四年及其以後に於て横山博士の日本鮮新及洪積世氣候に關して、發表された氣候論に對する意見であつて、横山教授は東京四近の地層中に包含せらるゝ介類化石の材料より、中部日本は、鮮新世初半に於て、現今より遙に氣候寒冷にして其後徐々に温度上昇し、洪積世に至りて其極に達し、後再び少しく寒冷となり、以て今日に及べりと、説かれたるに對し、本論文は横山博士の材料の外に、更に東北大學の地質學教室に於て採取せる材料により、其結果から嘗て、米國スタンフォード大學のスマス教授が、始新世より氣候漸次低下し、第四紀初半に於て其極に達し、後半に於て急轉温暖となり、後幾分低下して、現今に至るを説ける氣候論、それは歐米の氣候の變化であるが、我國の第三紀から四紀にかけての氣候もそれと同様に一致した變化がある。横山教授の主張せらるる日本の洪積世が、特に温暖なりしと云ふ、化石上の證左は薄弱であると論じたもので、矢部教授は、北半球は一般的に歐米も日本も洪積世は氣

冷であつたものだとの説明を加へんとしてゐられる。果して然りせば、この氣候論はひいて我國の氷河問題にも關係すべき重要な議論であるから、序に最近の氷河論を一瞥する。それは昨年二月に、*American Journal of Science* に出た *Glaciation of the Japanese Mountains* (山崎直方) である。この論文は實は博士が一九二〇年八月ホル、に開かれた第一回汎太平洋會議に出られた際の講演であるこの事であるが、著者の意見によれば、現在日本アルプスの麓に於ける一年間の氣温と、歐洲維納の氣温に比するに全く相等しい。而し其地の高度は、維納よりも三百五十米丈け高い。維納では其近かくのアルプスが維納よりも三千米高い點で雪線に入つてゐるから、同じ割合に、我國のアルプスも、高度がひししいから、今日よりも猶三四百米高いならば永久の雪をいたゞく事が出来るのであるが、低い故に我國には現在歐洲アルプスの如き氷河がない。而して過去の氷河の跡である *Cirques* を調査するに、何れも二五五〇米の高さに止まつてゐる思ふにこれは明に氷河時代の雪線である。従つて氷河の

被覆地は過古に於ても山頂の一部に限られたもので、我國の氷河は東方アジアと同様に、歐米の如く發達しなかつたものである。これは當時の氣温が高かつたため、氷河時代の東亞の氣候は、大に研究に價するに述べられたものであるが、これをさきの洪積世氣候論と對比して餘程考へせられる點が多いと信ずる。吾人は、我日本アルプスの氷河地域が今日よりも、猶一層に研究せられて、果して當時の雪線が二五五〇米の高さに止まつて居たか否や、換言すれば我國の氷河も歐米の氷河の如くに、一期二期三期と區別づけられるやうな遺跡がないか否やと云ふ事を明にしたいものだと思へる。従つてこの問題は今後に於て解決されなくてはならぬ。次に昨年は地震の割合に多かつた年で九月二日及十五日には臺北に強震があり、十二月八日には肥前温泉岳に地震があつて、何れも地震學者、又は地球物理學者の注目をひいた。中にも十一月十日、午後十一時四十八分頃、南米智利に大地震が起つた。それが東京帝國大學の微動計に感受し。震動時間が殆んど五時間半に達した、其の震動の形から

「南米智利大地震の觀測ニ震波の徑路」(大森房吉、地學雜誌、學藝)に於て、在來 Wiechert 教授などか初期微動は Rayleigh wave でなくて内部を通過するものであることを明せるに對して、疑を挿み、初期微動も亦地球表面に割合に近く、并行線を描いて傳播するものだとの確信を得たことで、圖示して其結論を示めされた。これは地震學のみでなく、地球の内核が、いかゞであるかといふ議論にも關するもので容易ならざる新説である。著者は太平洋底通過の震波は大なる傳播速度を有するも、亞細亞大陸横斷の震波は、頗る小なる傳播速度を示めすが故に、初期微動の波は、割合に淺き地下を通過するものであること述べ、傳播徑路圖が示めされてあるけれども、其波はレリー・ウェーブであるや否や、何故に其波は地球の内核を通じ能はぬかといふ説明がしてなるから、残念ながら著者の新説がウィーヘルト教授其他の學者の説と異なつてゐる要點を理解し能はぬ。猶關東地方地震の原因に就て「及「同地方震源の深さに就て」(同人、地學雜誌)の二論文があることを附記する。

次に昨年の初に大阪毎日新聞社の日本環海々流調査業績の發表のあつた事を注意したい。それは和田博士の説明もあり歴史上の調査も詳述されてゐて、大正二年から六年迄に投入した標識艇の行へを記し一枚の圖を附録したものである。これによりて、日本と亞細亞との間に存する海の環流が明になつたわけで、大正七年四月に、水路部から出版の日本近海々流圖には資料不十分のために「オホツク海」や日本海の海流を記してゐない位だから猶更結構な企であつたものと思はれる。もしこの書を讀んで然るのち古代交通の道筋や北陸方面と渤海間又は朝鮮との間に存する文化上の關係を調査すれば餘程面白くなるであらうと思ふ、「古代日滿の交通」(下田禮佐、商業と經濟)の中に論じてある航路の一部は、この意味に於て、餘程有益なる論文で、下田氏は渤海の東京龍原府が日本道で日本海岸にあつたから渤海の使者は常に日本沿岸に來着して、頗る我官憲を狼狽せしめたが、其結果、延暦二十三年には、能登に客院をつくり、延喜十九年には越前松原驛館の客徒が、一百五人の多きに達したことを

をのべ、同時にこの航路を、季節風のみによつて説明してあるが、予はこの歴史的事實をこの環流の存在によつて猶一層明瞭に説くべきものだと思へる。次に「最近に研究せられた新天氣豫報術」(國富信一、學藝)がある。

これは諾威のビエクネルス教授の考を紹介せるもので低氣壓の前面の氣流線は、所謂前哨線といふ形をなし、乙字形に彎曲してゐる。そこでは、暖氣流は、寒氣流の上へ昇るから、低氣壓の前面には常に降雨地帯を構成するさき、かゝる乙字形は一個所のみに存在しないで、珠數玉の如く、連續して廣く地球を取り巻いてゐるものだと思明してある。從來の等壓線圖では氣流を平面的に考へすぎてゐるがこの方は立體的に考へたもので餘程氣象學上の參考になると思ふ。「砂丘移動の人文上に及ぼす影響」(小牧實繁、歴史と地理)は北陸海岸實地踏査の結果石川縣河北郡の砂丘に就て學理上の説明を加へ「樺太島に於ける南北性と西北性」(徳田貞一、地質學雜誌)は、昨年から本年に及び、九回に亙る大論文で同島の地質構造線に關する詳密なる研究であつて「ジュース」教授の地貌論

に於て樺太山系に關してのべた意見に對し異なつた見解の發表あり。其の附記として樺太の河口谷に就き樺太の或部分は五六尋から七八尋まで沈降したと思へるこのべ世界的水準の大變化に説き及んである。「本邦白堊屬に對する一考察」(江原直伍、同誌)は我國の白堊屬に三種の區別あることを明かにし従つて白堊紀には本邦に三回の「transgression」があつたと思へるべしとのべ「北桑田郡の地形と人文」(藤田元春、歴史と地理)は京都府下北桑田郡は準平原の浸蝕されたもので其地形と氣候とがいかに經濟生活に影響してゐるかといふ事をのべたものである。

この外支那の自然地理に關するものに二三注意すべきものがある。「支那山東省地學巡見記」(山根新次、地學雜誌)は青島黃縣萊州平度沂水地方の地形地質の報告であつて「北支那の地質」(同人、同誌)は氏が從來探險された北支那の地質に關する概論である。其論中九龍石灰岩層の上にある濟南石灰岩層に就きウ井リス氏又はリヒトホーフェン氏の誤を正し、北支那全部に亙る夾炭層の狀況又は陝西省と名づくる石油層の説述なきあつて誠に有

益な論文である、「黄河々道變遷の地文學的考察」(藤田元春、史林)は黄河のデルタを取扱つたもので河は古へ大經の西から北行大陸澤に出でたものであるが其後東移し再び西轉し三度目に南移しそれから又北移して現在に及び其の間に渤海灣や黃海々岸を埋めた地域の廣さに関し詳説したものである。人文、地理の方面では「世界改造の地理學的考察」(下田禮佐、歴史と地理)は前年以來引きつゞいての努力で本年は塙匈國の崩壞、勞農露國の近狀等愈出で、精細を極め、「世界に於ける人口の變化」(A B 生、地學雜誌)は一九二〇年に於ける各國の人口調査の結果をのべ「北樺太の民族に就て」(鳥居龍藏、地學雜誌)はギリヤークが孤立民族である事を述べて其研究の必要をこき、オロチョン人は南ツングーズに屬しかの肅慎人との關係あるもの古代に石狩川畔に住居したものであると説き今日の樺太では南にアイヌ北にギリヤーク、中間にオロツコが喰込んでゐるこの説明である。「國境に關する歴史的地理的考察」(及川儀右衛門、歴史と地理)は國境の種類即領土、領海、及領空の限界の三種類について考察し

てあり「交通の地理的研究」(西龜正夫、同誌)は航路運河等に就てのべてある。經濟、地理の方面で「歐羅巴に於ける國境の移動が鑛産に及ぼせる影響」(井上禧之助、地學雜誌)は、獨逸、奧太利洪牙利の國境が改造された結果、鑛物の分布が違つて、其の著しき事實としては、世界第一のローレン鐵鑛地が佛國に入つたけれども同國には之を製鍊する石炭がない。獨佛兩國が協定して行けぬとする、鐵の產額に影響がある、現在で歐洲の鐵石炭の產出額は、非常に減つて戰前歐洲全體から年に三百六十萬噸を出したのが、一九二〇年には百七十萬噸に激減したと説き、「愛媛縣に於ける工業原料鑛物」(渡邊正三郎、同誌)は陶石、粘土、格魯謨鐵鑛、長石、石英等について説明し、「獨乙工業の聯合組織」(保科正眼、同誌)は戰後獨乙工場の合從連衡をのべて、「スチンネンス」、「チツセン」、「フェニックス」、「スタム」等の各組合が製鐵機械工業に活動して居る狀態をのべ、戰後英國に於ける石炭及鐵に就て(井上禧之助、同誌)は同國勞働問題のため、鐵石炭の產が戰前に及ばざるの理由をしめし、工業の地理

的分布と聚落形態との關係(黑正嚴、歴史と地理)は其要素を、地理的及地方的及地區的の三ヶ條に分ちて工業の地理的集中の理を論じ、本邦油田に試みられたる「スミスタン」式空氣壓入法の結果について(新谷壽三、地質學雜誌)は越後浦瀬油田に於て、地層中の殘存油を抽出するために空氣を一つの井に入れて他の多くの井の出油を増加せしめた報告である。年々出油總量の減少しつつある、我國の油田に於ては近頃注意すべき作業の一つである。最後に「近年、陸地測量部より刊行せる地圖類に就きて」(辻村太郎、同誌)は同部の百萬分一、五十萬分一、廿分一、五萬分一、二萬五千分一、二萬分一等の各種の地形圖に就て短評を加へたもので注意すべき暗示に富んだ文字である。

氏は明治初年より行はれし二萬分一地形圖は、極めて精密明瞭で、地形を明にするにようしいが、これが漸次廢刊せらるゝことを惜しみ、地圖の恩惠を感じるに共に、之を改善すべき責任の一部が地質學者にも存すを論じてある。實にこの事は地質學者のみこゝにはず、學界は勿論社會一般が地圖を利用すること非常に進んだ今日、二萬

分一の如き良圖の廢刊されない事を希望すると同時に、又一方では、一日も早く手頃な信憑すべき良地圖書の出現せんことを翹望する。(藤田)